

平成 31 年度 日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業

日本語教師【初任】(活動分野:生活者としての外国人)に対する研修

事業報告書

2018年 / 2019年

株式会社インターカルト日本語学校

目次

1	教育課程の検討	1
2	教育内容の確認	3
3	教材の検討・開発	5
4	オンライン講座について	8
5	研修内容報告	
5-1	日本語教育の大きな変化について	12
5-2	「生活者としての外国人」の多様性・社会参加と「標準的カリキュラム案」ができるまで	15
5-3	「生活者としての外国人」のための「日本語教師」のこれから① ～目指したい教師像～日本語教師に求められること これからの日本語教師に求められること	18
5-4	「生活者としての外国人」にとっての異文化受容	21
5-5	「生活者としての外国人」のための「日本語教師」のこれから② ～成長する教師～	23
5-6	日本語教師の成長と自己研修	25
5-7	事例研究（福島）	27
5-8	事例研究（千葉）	30
5-9	事例研究 ～ひらがなネット株式会社の事例から～	33
5-10	事例研究 ～NPO 法人 PEACE の事例から～	37
5-11	生活者としての外国人の声	40
5-12	やさしい日本語 ～「伝わる」伝え方～ やさしい日本語 基礎編、実践編	42
5-13	さまざまなアプローチ② ～学習者の言いたい気持ちを大切に～ たくさん話す工夫② ～語彙からのアプローチ～	44
5-14	会話を引き出す教授法① ～ことばのキャッチボール～	47
5-15	会話を引き出す教授法② ～ことばのキャッチボール～	49
5-16	さまざまなアプローチ③ ～学習者の言いたい気持ちを大切に～	51
5-17	さまざまなアプローチ① ～学習者の言いたい気持ちを大切に～ たくさん話す工夫① ～can-do を用いたアプローチ～	53
5-18	教材作成 ～その場でできる教材づくりのコツ～	55
5-19	教育実践のための技能	58
5-20	外国語としての日本語文法	61
6	事業全体の評価	63
7	研修の様子	69

1 教育課程の検討

教育課程の検討手順

① 実態の把握

- ・ 実際の問題点等、現場での実情をきめ細かく反映させるために関係各団体にヒヤリング
団体：福島国際交流協会、日本語教育研究所、千葉国際交流協会、それぞれの代表者
ヒヤリング内容：「現場で求められる人材に必要な能力」
「そのために必要と思われる研修」について
- ・ 検討の結果、「事例研究」として各現場のさまざまな取り組み事例を盛り込み、受講者が自ら考える研修にすることを決定。また受講者同士で意見を出し合い、「成長を続ける教師」を目指すことができるようなワークショップを多く取り入れることにした。

② シラバスの検討

- ・ 内容の設定
『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』の「生活者としての外国人」に対する日本語教師【初任】研修における教育内容を参考に討議
- ・ 単位時間数の設定
「生活者としての外国人」に対する日本語教師【初任】研修教育課程編成の目安を参考に討議
（「シラバス」参照）

③ スケジュールの検討

- ・ 研修後受講者の収穫と伸び率を最大限にするシステムの構築
OJT の実施：受講者それぞれの現場での実施
受講者の目標設定と振り返りを随時行う
OJT 実施後の振り返りは当該講師が必ず行いフォローする
OJT の方法：
集合研修（4 単位時間）
それぞれ持ち帰って準備（2 単位時間）
1～2 週間後以内にそれぞれの現場で OJT 実施（1～2 単位時間）
OJT シートの作成、提出（1～2 単位時間）
↓
1～2 週間以内に集合研修にて共有、フィードバック
（「教育課程」参照）
- ・ 日時の設定
受講者が無理なく研修が続けられるような日にちと時間の設定
1 時間目（9：30～11：00 2 単位時間）
10 分休憩
2 時間目（11：10～12：40 2 単位時間）
昼休み
3 時間目（13：40～15：10 2 単位時間）
（教材「日程表」参照）

④ 研修方法の検討

- ・事例研究や問題解決学習など主体的・協働的に学べる学習形態にする。
- ・研修が長期にわたるため、出席できない場合を考慮し全講座を録画しておき、後日視聴できるようにする。

1. 集合研修（1）講義型研修 1）対面研修
2）オンライン研修 Zoom を使用
（2）ワークショップ型研修 1）対面研修
2）オンライン研修 Zoom を使用
2. 実践研修 各受講者の現場での OJT 形式による活動参加、振り返り
3. 録画視聴
 - ・申込時に受講者の研修環境も把握しておく （教材「お申込みアンケート」参照）

⑤ 評価の方法を検討

1. 毎回振り返りシートを提出 （教材「振り返りシート」参照）
質問に対しては次回に回答し、問題解決につなげる
2. OJT シートの提出 （教材「OJT シート」参照）
OJT の振り返り時に講師と受講者が共有し、さらに理解を深め、発展させて今後の課題とする
3. 研修全体のアンケート
（教材「終了アンケート」参照）
4. 修了要件
 - ・出席（録画の視聴回数）
 - ・OJT の振り返りシートの提出上記2項目において7割以上のものを修了と認め、修了証書を発行する
5. 評価委員会を組織し、効果の評価を行う

②教育内容の確認

3 領域		科目							
		日本語教育 の大きな変化 について	これからの 日本語教師	日本語教師 の役割	やさしい 日本語	生活者として の外国人の 声	教育実践の ための技能	日本語教師 の成長	研修の振り返 り
社会・文化・ 地域にか かわる領 域	(1) 国・地域の在留外国人	○							
	(2) 「生活者としての外国人」に対する日本語教育	○	○	○					
	(3) 言語サービス「やさしい日本語」	○			○				
	(4) 「生活者としての外国人」の多様性 ニーズの多様性	○	○	○	○	○			
	(5) 外国人住民の社会参加		○	○		○			
	(6) 「生活者」のライフステージに合わせたキャリアプランと日本語教育プログラム	○							
	(7) 「生活者としての外国人」の異文化受容・適応		○	○		○			
教育にか かわる領 域	(8) 学習方法								
	(9) 日本語の学習・教育の情意的側面								
	(11) 各種指導法、教授法								
	(12) コースデザイン演習								
	(13) 日本語能力の評価							○	
言語にか かわる領 域	(14) 指導力の評価 自己点検 改善方法の共有						○		○
	(10) 「生活者としての外国人」のための教材・教具リソース								
	言語								

3 領域	16下位区分	科目												
		事例研究					会話を引き出す教授法	さまざまなアプローチ			外国語としての日本語	教材作成		
		千葉	ひらがなネット	PEASE	福島	さぼうと21	ことばのキャッチボール	学習者の言いたい気持ちを大切に たくさん話す工夫 Weekly J 語彙から 文型から			文法	その場でできる教材		
社会・文化・地域にかかわる領域	(1) 国・地域の在留外国人施策	○												
	(2) 「生活者としての外国人」に対する日本語教育	○			○	○								
	(3) 言語サービス「やさしい日本語」				○									
	(4) 「生活者としての外国人」の多様性 ニーズの多様性	○	○	○	○	○								
	(5) 外国人住民の社会参加		○		○									
	(6) 「生活者」のライフステージに合わせたキャリアプランと日本語教育プログラム	○	○	○	○	○								
	(7) 「生活者としての外国人」の異文化受容・適応	○	○	○	○	○								
教育にかかわる領域	(8) 学習方法						○	○	○	○	○			
	(9) 日本語の学習・教育の情意的側面	✓	✓	✓	✓	✓	○	○	○	○				
	(11) 各種指導法、教授法						○	○	○	○				
	(12) コースデザイン演習			○		○								
言語にかかわる領域	(13) 日本語能力の評価					○								
	(14) 指導力の評価 自己点検 改善方法の共有													
	(10) 「生活者としての外国人」のための教材・教具リソース								○	○			○	
	言語											○		

3 教材の検討・開発

研修の実施に際し、効果的な教材の作成を目指し検討した結果、以下の6種類となった。それぞれの目的と内容等を示したあと、後半に使用後の成果と課題をまとめて示す。現物は「教材等の成果物」参照のこと。

1. OJT の実践に用いる教材

名前：「OJT シート」

目的：現場での実践に際し、目標、実施内容、反省点、新たな工夫を明確にするため
担当講師へ提出し、振り返り日に発表、共有、フィードバックを得るため

内容：・目標と実施計画（具体例、教案）の記入

- ・実施日と内容の記入
- ・気づきや改善点の記入
- ・今後に向けて、新たな工夫を記入

形式：自由記述

提出方法：電子メールで

提出期限：「振り返り日」の2日前まで

注意事項：提出を修了要件とする

2. 研修日ごとの振り返りシート

名前：「振り返りシート」

目的：①講座後の気づきを言語化することによって、学習したことや疑問に思ったことを整理し、次回の研修につなげるため

②研修運営にあたって、受講者の意見を吸い上げるため

内容：講座で新しく知った知識や情報

自分の気づき

講座についての意見

形式：自由記述

提出方法：電子メール

提出期限：特にないが、質問等のフィードバックのために約2週間後

録画で視聴した受講者は視聴後2週間程度

3. 事前アンケート

名前：「お申込みアンケート」

目的：受講希望者の現状とニーズを把握するため

内容：所属、現場の有無、日本語教育歴

受講形態（通学・通信）

メッセージ

形式：質問に答える

提出方法：Web 上での申し込みと同時にアンケートができる仕組み（Google フォーム）

4. 全研修終了後のアンケート

名前：「最終アンケート」

目的：①全体を通して、受講前と受講後の成長を振り返るため

②本研修に対する総合評価を得るため

内容：回数、時間数の適不適

内容に関する意見（改善点、要望）

録画に対する意見

その他

Web 受講者向け・・・音声、画像、資料の具合の良し悪し

Web 上で発言を求められることに関して

Web 上でグループワークすることに関して

改善点や要望

形式：自由記述

提出方法：電子メール

提出期限：修了後 2 週間程度

5. 講座の時間割表

名前：「日程表」

目的：日時、内容、担当講師をわかりやすく知らせるため

内容：時間、科目名（講座のタイトル）、講師名、OJT の無有

6. 研修後の自己評価

名前：「追跡アンケート」

目的：研修後の動向調査

研修後の自己評価（成長）を言語化するため

内容：所属（受講当時と現在、将来）

研修で参考になった活動（現在行っている活動）

将来の方向性（研修後、考えが変わったことなど）

改めて研修に対する希望

各教材の成果と課題

1. 「OJT シート」

実践を行った受講者は思い思いにもれなく記述し提出した。すぐに、担当講師に送付、担当講師はそれらをチェックし、「OJT 振り返り」の日までに共有、フィードバックするという連携ができた。都合で担当講師の振り返り日までに実践ができなかった受講者も、後日提出をし、担当講師からのフィードバックをメールで受けた。

それぞれに現場が異なるため、OJT といってもその場での指導はできない。後日となるが各

担当講師からはきめ細かい指導を仰ぐことができ、受講者の満足度は高かった。また、現場での実践ができなかった受講者も、他の受講者の実践と講師からのフィードバックの共有は学びが多いばかりでなく、自分だったらどうするかを考える機会になり、日ごろの活動に即応のできる内容になっていたと思われる。

2. 「振り返りシート」

受講者はそれぞれの気づきを思いのままに記載することができた。質問等は担当講師に伝え、次の回にフィードバックをした。また、本研修コーディネーターがすべてをチェックし、研修に対する要望はすぐに反映、反映困難なケースはその旨説明をした。

データでの提出にしたので、シートは手元に残る。それぞれが後日振り返ることができ、本人の成長の記録としても有効だと期待できよう。

3. 「お申込みアンケート」

結果に基づいて、ニーズ等必要なことは各講師に連絡。きめ細かい対応に有効だった。

4. 「最終アンケート」

講座の終了後には、OJTの実施やOJTシートの提出、録画の視聴がまだの講者がおり、反省の色の濃いものが多く見られたが気づきも多かった。終了直後の感想を思いつくままに書き残しておくのは、講座ごとの振り返りシート同様、成長の記録として有効である。

5. 「日程表」

OJTの振り返りの日が講師によって違うため、現場での実践とOJTシートの提出日に間違いないよう、受講者は絶えず日程表をチェックしていた。

6. 「追跡アンケート」

受講当時と現在の活動の場の違いや、取り組みの違い記入してもらうことにより、受講者の成長を知ることができた。1年前の自分との比較は受講者にとっても成長を知るよい機会になったと思われる。一方、2019年度を受講者は、修了間近ということで、特に変化を記入するのは無理な面もあったが、研修で参考になった活動や将来の方向性（研修後、考えが変わったことなど）を回答し、研修後のさらなる振り返りになったと思われる。

4 オンライン講座について

当事業において研修を実施するにあたり、遠方にお住いの方にも受講の機会を提供すること、また異なる地域の受講者が参加することでそれぞれの課題を共有することなどを目的とし、遠隔地からでも参加できるよう Web 配信での受講形式を準備した。

また配信内容については録画をし、通学受講者を含め後日内容の振り返りができるよう、eラーニングツールを活用した。

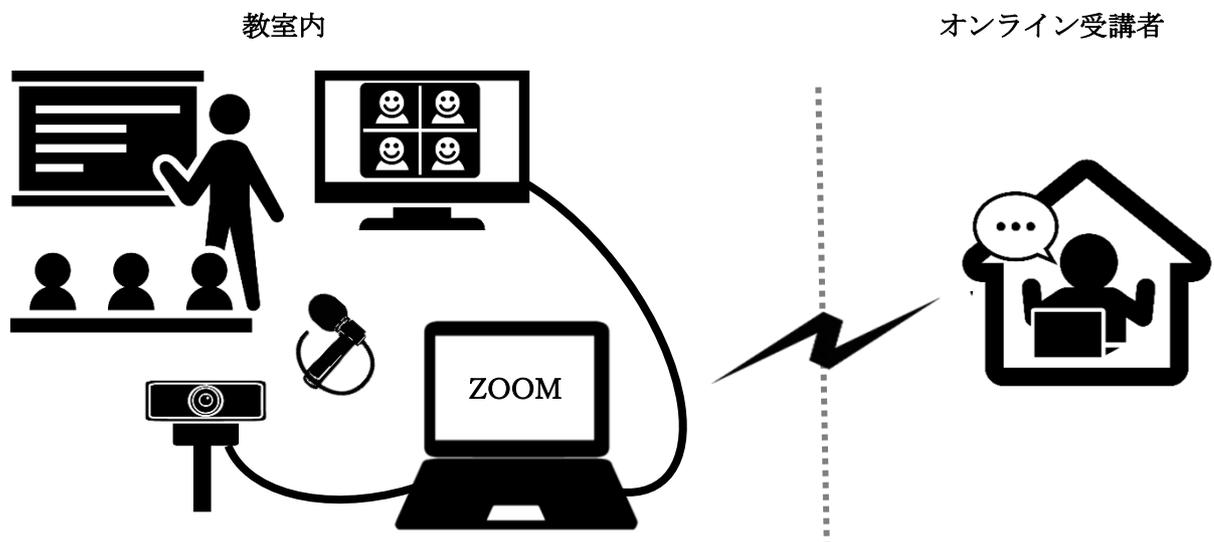
1. 研修配信時使用機材等

講師

- ・配信用パソコン
- ・Web カメラ
- ・ワイヤレスマイク（ハンドマイク／ピンマイク）
- ・集音マイク
- ・配信システム（ZOOM を使用）
- ・表示用モニター（オンライン受講者）

受講者

- ・パソコンやタブレット、スマートフォン等
（イメージ）



Web カメラで教室での研修の様子を撮影し、音声はワイヤレスマイクや集音マイクを用いて収録。その様子を ZOOM にてライブ配信し、オンラインでの受講者は自宅にて受講する。また ZOOM にて双方向の通信を行うことで、オンライン受講者の様子も教室内の受講者に見えるよう表示用モニターを設置した。

2. 実施状況

講師は通学受講者に対して研修を実施すると同時に、オンライン配信システム（ZOOM）を使用し、研修の様子をライブ配信にて実施した。オンラインでの受講者はパソコンやタブレット、スマートフォンなどを使って研修を受講した。

オンラインでの受講者の動作環境を確認するため、研修開始前に動作確認を行うとともに、毎回の研修にスタッフが参加し、オンラインでの受講者や講師のフォローアップを行った。

研修内では、講師による講義型の研修のほか、ワークショップ型でグループディスカッションなどを行なったが、オンラインでの受講者も通学の受講者と同様にオンライン上の受講者同士または画面越しに通学の授業者と一緒に活動を行なった。

またオンラインで配信した研修は録画を行い、研修の振り返りや欠席をした際の補講として活用できるようにした。録画の視聴には別途学習管理機能のついた e ラーニングシステムを使用し、受講者の受講状況を把握できるようにした。

3. 実施結果

オンラインでの受講形式を設けたことで、通学が難しい遠隔地の受講者も研修に参加することができ、受講者が異なる地域から参加することで、それぞれの状況を共有し学ぶことも多かった。またワークショップ形式の研修についても、オンライン受講者も通学の受講者と同様に参加することができ、オンライン受講であっても実りある学習となった。

開始当初使用していたハンドマイクでは通学受講者の発言が拾いづらい、マイクを回し忘れてしまうなどのトラブルもあったが、集音マイクを導入することで、受講者間でハンドマイクを回さなくても受講者の発言を拾うことができるようになった。その他の機材等のトラブルに関しては、スタッフが常駐することで素早いフォローアップを行うことができた。

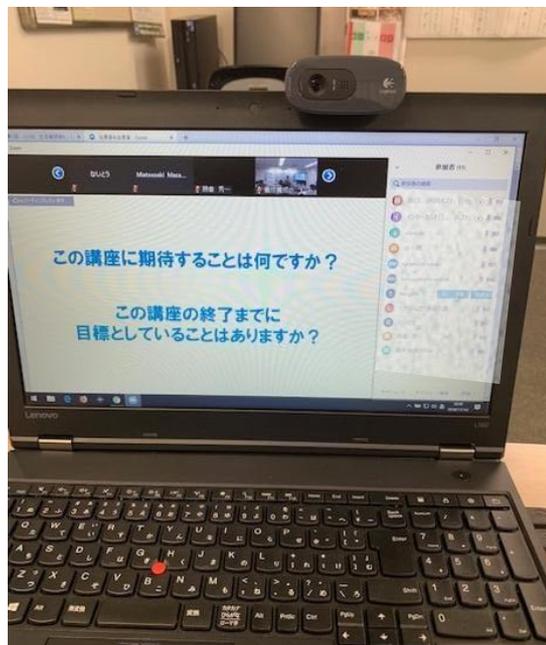
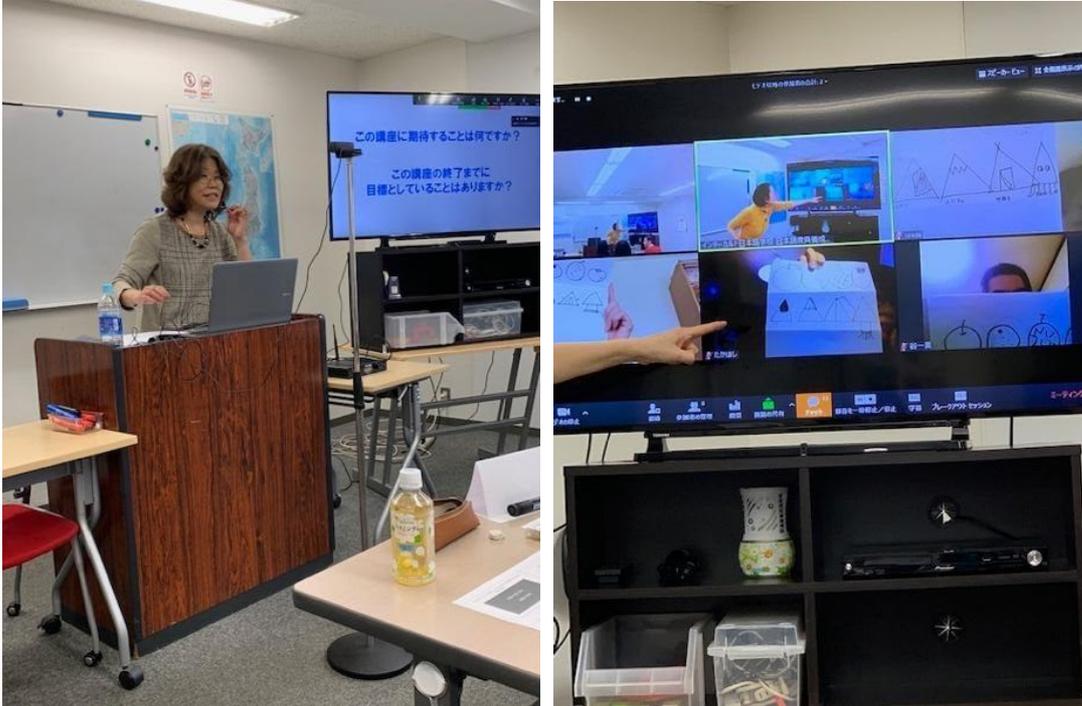
4. 今後の可能性と課題

前述した通り、オンライン受講という形式を用いることで遠隔地の受講者も参加することが可能となり、地域で活躍する日本語教師を養成する上で、非常に有効な手段である。また今回実際にオンライン受講を実施する中で、やり方を工夫することでオンラインであっても発展的な活動につなげていけると感じた。

ただ、講師や受講者の IT リテラシーが様々であることから、事前の動作確認や操作方法のレクチャー、受講開始後のフォローアップなどは必須であると感じた。そのため、研修内容とは別に、受講者や講師のサポート体制をいかに整えておくかが今後の課題である。

【参考】

研修のオンライン配信の様子の写真



5 研修内容と報告

科目名	日本語教育界の大きな変化について
担当講師	西原鈴子 （日本語教育研究所理事長/文化審議会国語分科会日本語教育小委員会元主査）
単位時間数	2019年度 4単位時間
目的	大きな変革期を迎えている日本語教育界の現状を詳しく理解する。
教育概要	①日本語教育関連の近況 ②日本語教育に関する変化 ③変化をもたらした考え方 ④これからの日本語教師のあり方
内容	<p>《流れ》 （講義）</p> <p>①日本語教育関連の近況</p> <ul style="list-style-type: none"> ○国際交流基金による日本語教育機関調査（2018）速報値 過去最多の142の国・地域で日本語教育の実施を確認 機関数：18,604機関（過去最多） 教師数：77,128人（過去最多） 学習者数：3,846,773人（再び増加） ○文化庁国語課による国内の日本語教育の概要（2018） <ul style="list-style-type: none"> ・日本語教師等、日本語学習者数、日本語教育実施機関・施設等数の推移について ・属性別日本語学習者の割合（留学生、研修生・技能実習生、ビジネス関係者とその家族等・・・） ・出身地域別学習者数（アジア地域、南アメリカ地域、ヨーロッパ地域・・・） ・出身国別学習者数割合（中国、ベトナム、ネパール、韓国・・・） ○日本語教育の推進に関する法律について ○技能実習法について ○法務省 制度概要 <ul style="list-style-type: none"> ・在留資格について 特定技能1号、特定技能2号 ・受入れ機関と登録支援機関について ・新たな外国人材受入れ制度 ・在留資格により就労の可否 ○外国人材の受入れ、共生のための総合的対応策について ○法改正で影響を受ける日本語教育のカリキュラムーCEFR シフトー ○日本語基礎テストの能力水準について <p>②日本語教育に関する変化</p> <ul style="list-style-type: none"> ○なぜ今 CEFRなのか 学習観、教育観、教育・学習の目標日程、多様な評価

	<p>③変化をもたらした考え方 変化を支えた社会的状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CEFR の背景 ・CEFR の理論的枠組み（1）能力 ・CEFR の理論的枠組み（2）熟達度 ・CEFR の考え方を他の地域が取り入れる意味 <p>CEFR→JF スタンダードへ（JF スタンダードの木 国際交流基金）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「Can-do」とは ・日本における外国人受入の必要性 ・文化庁 「生活者としての外国人」のための日本語教育事業について 標準的カリキュラム案について <p>地域日本語教室の二つの過程</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「社会への出口戦略」をどう支えるか ・日本での就労課題 ・就労のための日本語学習に関わる諸要因 <p>④これからの日本語教師のあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ○これからの日本語教師の仕事について 日本語教育人材の役割・段階・活動分野に応じた養成・研修のイメージ ○求められる日本語教師の専門性 職域と知識領域
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過去 39 年間で 30 倍増にもなる推移や、初等教育が半分以上を占めていることは意識したことがありませんでした。特にアジア地域に限ったことではありませんが、学校教育の中での第二外国語としての高い地位を持っていることは勉強になりました。 ・韓国での学習者減の理由にもありましたが、日本との関係性や風評、ほかにも経済など様々な要因で数年で移り変わる事情を知り、常にニュースや情報のブラッシュアップの必要性も感じました。 ・国内の教育では、以前は漢字圏の学習者が多くを占めていたのに対し、ベトナムやネパールなど非漢字圏の学習者が増えていることから、「書く」という学習の比重が重くなっていることも改めて認識しました。 ・言語教育では学習者に日本語を学ぶ目標を明確にして、モチベーションを維持させることが大切をあらためて感じた。 ・日本語教育に関する法律の話はニュースなどを通じて知ってはいましたが、要点を体系的にまとめていただき、理解が深まりました。 ・技能実習法に関しては、今年始まった新しい特定技能に至るまでの流れや制度面に関し学べました。特に近年増えている介護での実習では、仕事場面での日本語を測る際に ・CEFR を参考にした can-do でのカリキュラム作成を行っている点は今後の自分にも参考になりました。 <p>《成果と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人に対する日本人の意識、特に技能実習生の方たちなどに対する一般的に軽んじることも多いのではという話では、彼らが社会から排除されないようにはどうするのかという自分たちの役割について改めて考えなければならないことである。

	<ul style="list-style-type: none"> ・目まぐるしく変化する日本語業界において、学習者のニーズも多様化しています。学生のニーズを適切に汲み取り、ニーズに合わせたカリキュラムの必要性を感じました。
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人材の受入れ・共生に関する関係閣僚会議 2018.12「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策」 ・「J F 日本語教育スタンダード 2010」（国際交流基金） ・「J F 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック」2010（国際交流基金） ・「日本語教育機関調査速報値」2019（国際交流基金） ・衆議院法務委員会 2018.11 「2019年度の特定期間1号受入れの見込み」 ・「新たな外国人材の受入れについて」2019.2（法務省入国管理局） ・「『特定技能』に係る試験の方針について」2019.2（法務省入国管理局） ・文化審議会国語分科会日本語教育小委員会 2010 「「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的カリキュラム案」 ・文化審議会国語分科会 2018 「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）」 ・「平成 30 年度国内の日本語教育の概要」2019（文化庁国語課） ・『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』吉島茂/大橋理枝（編訳）2004（朝日出版社）

科目名	「生活者としての外国人」の多様性・社会参加と「標準的カリキュラム案」ができるまで
担当講師	西原鈴子 (日本語教育研究所理事長/文化審議会国語分科会日本語教育小委員会元主査)
単位時間数	2018年度 4単位時間
目的	国の外国人施策を学ぶ。また、文化庁の外国人施策である「生活者としての外国人」のための地域の取り組みを詳しく理解する。
教育概要	①在留外国人の現況 ②各省庁の外国人施策 ③日本語教育に関する取り組み ④「生活者としての外国人」に対する日本語教育のカリキュラム
内容	<p>《流れ》 (講義)</p> <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・在留外国人の推移 ・29年末国籍・地域別在留外国人数 ・在留資格別在留外国人構成比 ・在留資格について <ul style="list-style-type: none"> 活動に基づく在留資格について 就労はできない在留資格 許可の内容により就労の可否が決められる在留資格 身分または地位に基づく在留資格(就労可) 高度人材ポイント制による出入国管理上の優遇制度について ・入管法改正に動き：国会審議の展開について <p>②各省庁の外国人施策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・内閣府の外国人施策 ・総務省の外国人施策 ・厚生労働省の外国人施策 ・法務省の外国人施策 ・文部科学省の外国人施策 ・外務省の外国人施策 ・文化庁の外国人施策 <p>③日本語教育に関する取り組み 文化庁の取り組み 外国人にに対する日本語教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○審議会における検討 ○具体的な事業の実施 * 「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 「生活者としての外国人」のための日本語教室空白地域解消推進事業 日本語教育の人材及び現職者研修カリキュラムの開発事業 条約難民及び第三国定住難民に対する日本語教育 他

	<p>* 「生活者としての外国人」のための日本語教育事業について 文化庁審議会国語分科会日本語教育小委員会における検討、作成。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「標準的カリキュラム案」 2. 「活用のためのガイドブック」 3. 「教材例集」 4. 「日本語能力評価」 5. 「日本語指導力評価」 <p>を活用し、地域の実情・外国人の状況に応じた取り組みを行う</p> <p>④「生活者としての外国人」に対する日本語教育のカリキュラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体制の整備→国、都道府県、市町村の役割分担 <ul style="list-style-type: none"> ・「生活者としての外国人」に必要な日本語の位置付け ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の目的と目標 ・「標準的カリキュラム案」で扱う生活上の行為の事例について <ul style="list-style-type: none"> 健康・安全に暮らす 住居を確保・維持する 消費活動を行う 目的地に移動する 人と関わる 社会の一員となる 自身を豊かにすることができる 情報を収集・発信する ・地域日本語学習者の目標 Can-do 事例 <ul style="list-style-type: none"> 社会生活の資格取得 社会で認められるために 日常生活の安全・安心のために ・日本語教育プログラムの作成手順
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・在留資格がこんなにたくさんの種類があることに驚いた。 ・日本がよりよい多文化共生時代を迎えるために早急な結論よりも、じっくり考えて制度を整えた上で外国人を受け入れるべきだと感じた。また、外国人に選ばれる国にならために何をすべきを考えさせられた。 ・各省庁での外国人施策について詳しく学ぶことができた。国がこのように細かく外国人に対して政策を行っているを知ってとても役に立った。 ・外国人労働者に対する施策内容が「人材不足業界の労働者をいち早く確保するため」のものであるかの認識が確固たるものとなった。各省庁の施策内容が「これから・・・」が大部分の状態では、「審議」する前の段階であり、このまま決定、施行はあまりにも強引であると感じた。 ・どんな状況の外国人でも「生活者としての外国人」に必要な日本語の習得が重要であると思った。 ・在留資格に関係なく、外国人が日本で安心して生活するためには日本語教育が不可欠であると感じた。 ・現在法制化されようとしている外国人施策について、理解ができた。 <p>いろいろな在留資格をもう一度きちんと整理ができた。地域住民と外国から来た人々がともに地域を作っていくのが、地域日本語実践プログラムの目指すところであることがよく理解できた。</p>

	<p>《成果と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化庁の地域実践プログラムということで生活に必要な日本語の習得を支援してくシステムはとても大切だと思う反面、受けれる側の日本人に対する新しい地域に入ってくる外国住民に対する異文化受容教育のようなものも行う必要があるのではと強く感じた。 ・外国人施策が様々に取られていることが理解できたが、一般的に浸透されたいないところが今後の課題であると感じた。 ・技能実習生など外国人労働者の受け入れる側の意識の改善をどのようにしていくのか、今後の日本の課題と思う。 ・地域の日本語教室によって活動や意識のばらつきがあること。また標準的カリキュラム案が浸透されたいないことに問題を感じた。地域で活動する人たちが国の情報をどのように得ることができるかなど課題は多いと感じた。
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・文化庁審議会国語分科会日本語教育小委員会 2010年「『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的カリキュラム案」 2011年「『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的カリキュラム案活用のためのガイドブック」 2012年「『生活者としての外国人』に対する日本語教育における教材例集」 2012年「『生活者としての外国人』に対する日本語教育における日本語能力評価について」 2013年「『生活者としての外国人』に対する日本語教育における指導力評価について」 ・文化庁国語科主催平成29年「日本語教育大会」提出資料 ・法務省ホームページ

科目名	2018年度 「生活者としての外国人」のための「日本語教師」のこれから① ～目指したい教師像～ 2019年度 これからの日本語教師に求められること
担当講師	加藤早苗（インターカルト日本語学校校長）
単位時間数	2018年度 4単位時間 2019年度 4単位時間
目的	現在の日本における外国人受入れの現状と国の動きについて理解し、自身がどんな日本語教師を目指したいかを意識化することを目的とする。
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人材受入れと育成の必要性と、国の取り組みについて知る。 ・外国人と日本人の異文化間の齟齬により生じている事例に触れ、異文化間理解の重要性について考える。 ・地域における日本語教育の多様な学びについて考える。
内容	<p>《講座》 （ワークショップ）</p> <p>①日本の外国人材受入れの現状と国の動き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策 ・在留資格「特定技能」 ・「日本語教育の推進に関する法律」 ・日本語教育人材の養成・研修の在り方 <p>②外国人材受入れにおける課題の事例</p> <p>（1）企業における外国人材の成功事例と非成功事例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ルールだから」というのが一番悪いパターンの言い方 ・日本人は、言わない文化、察する文化 <p>（2）日本語教育が必要な児童生徒への対応の事例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育現場における担当教師が抱える問題 ①対児童生徒 ②対外国籍の両親 ③对学校全体 ・文化がわかれば、できることがたくさんある <p>③地域における日本語教育の多様な学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語を勉強して、何ができるようになりたいのか、日本語の先にあることを知ることが重要 <p>④「支援」から「共生」へ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誰が外国人材と日本社会、外国人と地域社会をつなぐ「架け橋」になるか <p>⑤目指したい日本語教師像</p>
受講者の声／成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語教師は学校の先生ではないこと、立場が変われば自分も外国人であること、小さいことが実は大切だということ ・自分がどんな日本語教師を目指していくべきなのか、どんな社会貢献ができるのかを今一度よく考えるべきだと気づいた。 ・「どんな日本語教師になりたいのか？」…日本人として「日本の知識と日本語の専門性をもって活動をする」そして「さまざまな国の文化や言語に柔軟に向き合い、自分の枠をどんどん代えていく」自分でありたい。そして日本語教師

として活躍する際には、接する一人一人にワクワク感を与え、日本のファンをどんどん増やす日本語教師でありたいと思えた。

- ・「停滞は後進と同じ」という言葉、止まっているだけだと思っけていても、進んでいる人がいる限り後進していると考えられるというのは、当方にとって新しい考えだった。目標をもって聞くことの大切さ。記録を取るものの大切さ、終わってから振り返ると違った見方ができる。行動、体験中心の日本語教育が大切だということ。
- ・学習者の方から見た自分の立ち位置とその多様性による自分の目指す教師像。何が不足しているのかということ、経験においては日本語学校の体験。さらには海外の日本語学校での体験、海外での異文化の経験。異文化の受容と認知。
- ・講座の意義、意味、背景を教えていただいたことで、理解しておくべきこと、認識すべきことが明確になった。
- ・日本語を学習する必要がある外国人は本当に多様化していることがわかった。それぞれの学習者にとって、今一番教えるべきことは何なのか、何を求めているのかに合わせた日本語教育ができるようになりたいと思った。
- ・日本語の勉強をするために来ているわけではなく、その先に仕事や生活という目的を持っている人々がいる。その人々の中には、意味がわからないために母国で行っていた習慣や知識を活かせないでいる人々がいる。日本語を教えることでそのような点を共有し、コミュニケーションを取ることができる。伝えたいこと、目的を持って覚えたことは定着しやすいので、学習者のその時言いたいことを知ろうとする態度が大切だという話には大変共感した。
- ・生活者としての外国人は多様な背景を持った人で構成されている。殆どがボランティアで支えられている現状で、彼らに専門性を求めるのは難しい。一方、今後、専門性を持った人物が担うのであれば相応の待遇を要求する。基礎を自治体が担うにも財源がないだろう。誰がイニシアチブを取っていくのか？ゼロレベルの学習者こそ専門性のある支援者が必要だ。生活者としての日本語は、学習者にとっても支援者にとっても一定の基礎日本語を学習した後の設定でなければ、難しい内容の様に感じる。その上で、誰がどのように体系的に教えていけるのか、という疑問が残った。
- ・ゴールは途中で変わっても OK、停滞は後進、常に前進でもペースは人それぞれでよい。教師の目指すものはそれぞれの場所で違う、コミュニティの役割、教室。自分が言いたいことをちゃんとと言う、何が言いたいかをちゃんと知ろうとすることが大切。生活者としての外国人にかかわる教師は、教育機関にいるよりもっと大きな責任を負う。
- ・教えるだけにスポットを当てると、教える側主導になってしまいがちだが、学習者のニーズを考え、日本語の先にあるものを考えながら指導していくことが重要であることがわかった。PDCA の繰り返しで大事で、停滞は後退という言葉が心に残っている。
- ・行動・体験中心の教室活動、これは「生活者としての外国人」だけでなく、教室で学ぶ日本語学習者にも当てはまると思った。
- ・同じ地域に生活する住民として、外国人の方も地域づくりに参画できる人と人とのつながりが重要だということを感じました。何が言いたいのかを知ろうとする態度をもって、相手と向き合うことが大事だと痛感した。これからの日本語教師は、それぞれ活動分野があるが、日本語だけでなく日本語を軸として幅広く活動していかなければならないと覆った。
- ・異文化に対する受容がまだまだ私は出来ていないなと感じた。
- ・「どんな日本語教師を目指すか」や「日本語教師として、今、自分に不足していることはなにか」について考える時間があった。「自分が（教師が）この仕事を楽しいと思っけてやっけていること」、「楽しい・楽しむ」ということが、自分にとって人生で大事なことであることを再認識することができた。この講座

研修内容報告

	<p>を通して、どんな日本語教師になっていきたいかについて考えていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none">・「共に生きる」、一時的ではなく、この先も長く共生する「隣人」としてつき合うことが求められていると思う。・「日本にきて良かった、楽しかった」と思ってもらえることができるように、生活に必要な日本語、日本の慣習・文化を教えるという支援活動は、日本語教師とは違った立場での学習支援者にもできることかなと思う。日本と学習者の国との懸け橋になるという思いを、日本語教師及び日本語の学習支援者がもつことが大切と思っている。・外国人を受け入れる側も相手を理解していく気持ちが必要であること。「支援」から「共生」へ、互いに学びあうことでより良い社会が実現できる。一般の日本人にも異文化体験が必要、そのためにも外国人と一般日本人との間を繋ぐブリッジ人材となることを目指してこれからの活動をしていく。日本語教師として多様な学習者のニーズに対応できるようなスキルの必要性。
--	---

科目名	「生活者としての外国人」にとっての異文化受容
担当講師	加藤早苗（インターカルト日本語学校校長）
単位時間数	2019年度 4単位時間
目的	今後ますます進む多文化共生社会において、自身がどんな日本語教師を目指したいかを意識化することを目的とする。
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> 生活者としての外国人が遭遇する困難や疑問について知る。 ステレオタイプでの物の見方による弊害について考える。 異文化間理解のためのワークショップを通して自らを省みる。
内容	<p>《流れ》 （講義）</p> <p>①外国人と日本人の間で起こる異文化による齟齬 ・生活者、留学生、技能実習生の事例</p> <p>②ステレオタイプについて考える （ワークショップ）</p> <p>③自分の中の異文化に出会う「レヌカの学び」 （講義）</p> <p>④地域における日本語教育の多様な学び</p> <p>⑤「生活者としての外国人」に対する日本語教育の目的と目標</p> <p>⑥共生社会における日本語教師の役割と可能性</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> 私たちの役割が、言葉を教えるだけでなく、応じる架け橋になるということろで共感することがたくさんあった。思い込みをしないよう常に広い視野を持って携われるように気を付けていきたい。 自分が教室で意識をもってやっていたらいいではなく、発信することの大切さを感じた。教室にも自分にも限界はあるが、去る人には去る人の理由があるので、その理由にももう少し注目してもよいかと思った。 理解して学んだことを支援活動に生かしたいと思いつつ、忘れてしまい、先入観で見えてしまっている自分を反省できた。相手に興味を持ち受け入れられる共生社会を作るお手伝いを続けていきたいと思う。 外国の方がかなりの割合で日本語、日本文化を知らずに困っていることがわかった。 外国の人の目的、各個人の尊重をして、楽しく時間を過ごせたら良いです。会話のできる「場」こそ必要だと思う。 レヌカの学びを通して、自分がまだ固定観念が強いことを知った。その反省も含めて、海外で生まれ育たれたお一人お一人のさまざまなことをしっかり伺いながら、愛をもって対等につきあっていきたいと思った。 久しぶりに体験したレヌカの学び。作者も知っているだけに感慨深く、久しぶりにやってみると、迷うことばかりだった。でもそれは、私たちが接するすべての人に共通することで、こちらの思うことがイコールであるはずがないこと

- を改めて感じ考えさせられることとなった。
- ・知らないことはしょうがない面もあるかと思うが、学び知ろうとする姿勢だけは継続していこうと思う。いつか架け橋になれるような人材を目指していきたいと思う。
 - ・カードを選びながら、日本人にとって共通観念というものが世代などでだいぶズレがあること、ネパールの生活文化についていかに無知であるかを痛感した。
 - ・同じ地球人として、共生社会の実現のために何をしていきたいと考えていた。自分はステレオ的な人間ではないと思っていたが、思った以上に思い込みがあることがわかった。「つなぐ」「発信」することの大切さはわかったので、今の自分（職業）で何ができるのかを再度具体的に考えていきたい。
 - ・数年前に TV で「私に日本語を教えてください」という番組を見たが、単なる言葉の段階ではなくて、文化がその背景にあるのだということが今回の講座でよくわかった。
 - ・「日本人はこういうものだ」「日本人は外国からこう思われているのではないか」と思ったことと、実際一致していないことが多いことに気づかされた。
 - ・外国から来た人とお互いを尊重できる交流をしながら、日本語を教え、外国から来た人がよい選択ができるよう支援したい。
 - ・ただ教えることやスキルアップだけじゃなく、自分の役割、私の可能性ということを少し意識しながらやってみようと思う。
 - ・こういう場への参加は全く初めてだった。一人では難しいかなと思っていたことが、グループに参加することによって自然と協調できる自身に気づかされた。これが共生社会への第一歩でしょうか。
 - ・日本人がいかに固定観念で決めているのがわかった。改めて振り返ると、実際そうだったりそうでなかったりする。「レヌカの学び」を通して異文化の深さがわかった。今後もこのこの講演を元に、外国人に上手く日本語を教え、「橋」となれるようになりたい。
 - ・「つなぐ」という位置づけについて考えながら支援をしてゆきたいと思った。日本語支援をしていると、どうしても「先生」「生徒」という関係性から抜けられないのですが、相手の必要性を大事にしつつ、「ともに学んで」ゆきたいと思った。
 - ・朝、席に着いた時は「あれ、何か難しそう」と思ったが、あっという間の一日で、とても楽しく、外国の人、困っている人には声をかけて助けてあげたいと思う。
 - ・異文化を体感すると同時に、文化の違いを認めつつ自分自身も成長していけたら良いなと思った。
 - ・異文化に対する知識がないことを改めて実感した。それは日本の文化に対しても理解できていないことだとも思った。今後は日本の文化だけではなく外国の文化にも目を向けて学び、そして外国の方に関わるようにしたい。
 - ・偏見を持たず、友としての心構えを考えた。ボランティアを進める方向がはっきりした。
 - ・共生社会における日本語教師の役割を、明確に意識することの大切さを再確認できた。
 - ・学習者がなぜ日本語を学ぶのかを理解して、自己中心にならず、相手の立場を理解し、日本語支援を行うことの大切さを学んだ。
 - ・自分の偏見や思い込みがまだまだあることを認識した。日本語教師として何が自分にできるかは常に考えている。他国の文化、カルチャーを学んだり経験したりと実践はしているつもりだが、“つもり”になっているなと思った。相手のことを知れば理解しあえる。ミャンマーとの架け橋（小っちゃいですが）できればと思う。

科目名	「生活者としての外国人」のための「日本語教師」のこれから② ～成長する教師～
担当講師	伊東祐郎（東京外国語大学副学長 講座当時）
単位時間数	2018年度 4単位時間
目的	学習者（外国人児童生徒を含む）と地域住民の多様な背景とニーズを理解し、各機関の取り組みを知り、地域日本語教室で活動する上で適切に関われる知識を持つことを目的とする。
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人児童生徒が置かれている現状、諸問題、各機関の取り組みについて知る。 ・地域日本語教室の現状を理解し、役割について考える。 <p>学習者の社会参加を狙いとする「参加型学習」について知る。</p>
内容	<p>≪講座≫ （講義）</p> <p>①外国人児童生徒</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 外国人児童生徒にとっての日本語教育の意義 2. 外国人児童生徒が置かれている状況 日本語指導が必要な外国人児童生徒数、日本国籍児童生徒数 在籍する学校数、在籍人数別市町村数など 3. 外国人児童生徒を取り巻く諸問題 <ol style="list-style-type: none"> （1）子供固有特有の要因・事情による課題 （2）受け入れ態勢・意識に関わる課題 （3）日本語指導に関わる課題 4. 諸課題解のための国、地方自治体、学校の取り組み <p>・これらを把握し、適切に関わることが重要である。</p> <p>②地域日本語教室</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『標準的なカリキュラム案』の目的、目標、生活上の行為の紹介 ・「地域日本語教室」の現状 ・「地域日本語教室」は多文化交流の最前線という位置づけ（内容・課題・話題を重視した活動→コミュニケーション重視型） ・「地域日本語教室」の役割 <ol style="list-style-type: none"> ①居場所→②交流→③地域参加→④国際交流→⑤日本語学習 ・日本語プラス「開発教育」：共に生きることのできる公正な社会づくり 人間理解と人間関係づくり 人間と文化の関係性への理解 文化の表現・創造活動への参加→「参加型学習」 ・地域型日本語教育における「参加型学習」活動の特徴 <ol style="list-style-type: none"> （1）ボランティアと学習者、相互の学びの場・・・「対等」「対話」

	<p>(2) コミュニケーション活動の場・・・「共有」「協同」「共感」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「参加型学習」＝人間づくりのアプローチ <p>従来型の言語に焦点を当てて活動する日本語教育の領域とは異なっている。ボランティアと外国人双方にとっての「コミュニケーション力の向上」「相互学習・相互理解の場づくり」という観点からアプローチを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域日本語教室は、自己発信・自己表現・自己実現が可能な空間。社会参加ができる第一歩の場である。 ・コミュニケーション支援をする場づくりが大切である。
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講生の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思っていた以上に課題が多いということに気づいた。 ・日本語を教えるばかりでなく、相手が自己実現できる、表現できる、役に立てる場所になるような内容を盛り込んでいきたい。 ・「地域日本語教室」の役割やあるべき姿が具体的でよくわかり、また『標準的なカリキュラム案』とそこで取り上げられている「生活上の行為の事例」の選択の背景を理解することができたので、今後自分がかかわっている日本語教室で積極的に取り入れていきたいと思った。 ・日本語学校に求められている目標と、地域日本語教室の目標はそもそも異なることに気づいた。 ・児童生徒に日本語を教えるということは、母語が獲得できている大人に教えることと全く異なることに気づいた。 ・外国人児童生徒のテーマについてとても勉強になった。 ・言語能力が欠けていることが社会で生活する上でいかに障害になるかという点が非常に重要な点だと思った。 ・児童生徒の日本語教育に関して、各自治体の取り組みに違いがあること、また消極的な体制であるのは自分の住む地域だけではないということがわかった。

科目名	日本語教師の成長と自己研修（予定） ※新型コロナウイルス感染拡大防止のため休講
担当講師	伊東祐郎（国際教養大学 専門職大学院 日本語教育実践領域 代表）
単位時間数	4 単位時間
目的	日本語教育における自らの指導力を分析的に振り返り、指導力の向上や指導計画の自己点検・改善方法を検討することを目的とする。
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語教育の現状（拡大化と多様化） ・日本語教師の資格認定の実際 ・日本語教師の実践能力とは ・海外の教師教育と資格認定の実例 ・再考、“グローバル社会”における日本語教師の実践力とは
内容	<p>≪講座≫ （講義）</p> <p>①日本語教育の現状</p> <ul style="list-style-type: none"> ・拡大化と多様化 ・学校型日本語教育、地域型日本語教育 <p>②日本語教育活動の実際</p> <ul style="list-style-type: none"> ・だれが、だれに、何のために、何を、どう、教えるか <p>③日本語教師の専門性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語教育能力検定試験、日本語教師検定（全養協）、学位、経験（実践知） ・日本語教師の要請における教育内容 <p>④日本語教師の資質・能力（横溝、他）</p> <p>（1）専門知識 2000年の「日本語教員養成において必要とされる教育内容」において示された5区分</p> <p>（2）実践力 その1 職務分析 授業前→授業中→授業後→授業前→・・・</p> <p>その2 職務分析 ①教案作成力=授業企画力 ②教材作成力=素材選定力 ③授業運営・進行力 ④音読力・朗読力・板書力 ⑤説明力 ⑥文書等作成力 ⑦テスト作成・評価力</p> <p>その3 簡潔・的確・平明に自分の言いたいことを表現する能力等（嶋田、2004）</p> <p>（3）専門性 その1 教師と学習者間の円滑なコミュニケーション能力・協働的態度（村松、1998）</p> <p>その2 日本語教員としての基本的な態度・意欲・感受性</p> <p>（4）説明責任能力 教師は学生、そして学生の学習に対するの責任を負う 等（當作、2003）</p> <p>（5）人間性 「学習者を思うこと」等（横溝、2002）</p>

	<p>(6) 自己教育力 教師自らの資質と専門性の向上と発展は常に求められるところである。(横溝、2002)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「探求の精神」 ・「絶えざる探求心」 <p style="text-align: center;">↓↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己研修型教師 <p>⑤日本語教育の多様性に対する認識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語教師と学習者 ・学習内容と言語習得 ・言語運用能力と言語習得 ・日本語学習と個人の成長 ・個人と社会文化との関わり ・メソッドとアプローチ <p>⑥日本語教師の専門的力量を考える</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) どのように学習者に向き合うのか。 (2) どのように言語習得・日本語学習をとらえているのか。 (3) どのように専門職としての日本語教師をとらえているのか。 (4) どのようにグローバル社会をとらえているのか。 (5) どのような日本語教育を目指すのか。 <p>(ワークショップ)</p> <p>『「生活者としての外国人」に対する日本語教育における指導力評価について』(文化審議会国語分科会平成 25 年 2 月 18 日刊行)の冊子内にある「指導力評価」の視点から自己点検(本冊 20 頁以降のポートフォリオについて導入)し、指導力とその評価についてディスカッションする。</p>
<p>参考資料</p>	<p>『「生活者としての外国人」に対する日本語教育における指導力評価について』(文化審議会国語分科会平成 25 年 2 月 18 日刊行)</p>

科目名	事例研究 ～（福島）蓬萊日本語教室の事例から～／OJT 実践の振り返り
担当講師	日下部喜美子（蓬萊日本語教室代表）
単位時間数	2018年度 4単位時間 講座 2単位時間 OJT 実践の振り返り 2019年度 4単位時間 講座
目的	地域日本語教室の現状を知ることで「生活者としての外国人」の多様性を理解し、日本語を教える際の姿勢、多文化共生の知識、目的に応じた学習内容等臨機応変に対応できる知識と技能を身につけることを目的とする。
教育概要	福島市の日本語教室の現状を知る。蓬萊日本語教室のさまざまな取り組み事例を参考にし、日本語教師初任者として自分なりにできることを考える。 「誰のための日本語教室か」「学習内容やスタイルは誰が決めるのか」という問いに対して考える機会を与える。
内容	<p>《講座》 （ワークショップ）</p> <p>①教室活動の工夫例として「自己紹介」の工夫について考える</p> <p>②他の人の発表を聞くことを習慣づけるために、質問を投げかける、ペアワークにして自己紹介をする、ゲーム性を取り入れるなど。 ★自己紹介をしたときの学習者の反応の変化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メモを取り出した。 ・聞き返すなどして、他の学習者の話を真剣に聞くようになった。 ・コミュニケーションも活発になり、出身国を超えて親しい関係ができた。 <p>→「自己紹介」はインフォメーションギャップの宝庫。「教師は説明する人」という感覚が薄れ、学習者同士が活発に伝え合うようになる。教師も参加者の一人。Facebook 参照</p> <p>（講義）</p> <p>③地域日本語教師を成り立たせているものを考えてみる 「地域日本語教育のシステム図」参照</p> <p>④福島県内の外国出身者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「福島県の現状」福島県ホームページより紹介 <p>⑤福島県内及び福島市内の日本語教室 月曜日から日曜日までどこかの教室が開いている。学習者は教室の特徴を理解し、選ぶことができる。また、各教室はお互いに連絡を取り合い、現況を報告している。（公財）福島国政交流協会のホームページ参照</p> <p>⑥蓬萊日本語教室について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立ち上げから現在まで 苦労やスタッフと学習者の変化 ・学習スタイル…レベルに関係なく全員一緒に学習 <p>学習項目やテーマは、雑談から決めることが多い さまざまな活動を取り入れた日本語講座の実施</p>

	<p style="text-align: center;">最後に学習項目を使って作文し、発表する</p> <p>⑦2019 年度文化庁受託 「生活者としての外国人」のエンパワーメント事業 【取組1】 来日間もない外国人のための生活ガイド ・生活に役立つ、活動を取り入れた日本語講座 課題例：日本人家庭を訪問しお昼ご飯をごちそうになる 通りすがりの人に道を尋ね目的地までたどり着く 交番で遺失物届を出す など ・教材の開発</p> <p>【取組2】 外国出身者の持つ知識や経験を活かす ・日本語ボランティア研修会 ・世界に一つだけのエピソード発表会 ・自国の料理を紹介する日本語講座 「蓬萊日本語教室の方針・目的」紹介 方針：日本語教師がなんでも答えてしまわない 質問した学習者に直接答えなくて、みんなの質問に対して、 みんなで考える。 目的：在日外国人及び外国にルーツを持つ人々が、地域社会で円滑に生活 でき、自己実現ができるよう応援することを目的とする。同時に、 会員相互の親睦を図り、健全な地域社会の発展及び多文化が共生す る社会の実現に寄与することを目的とする。</p> <p>(ワークショップ)</p> <p>⑧日本語教室の役割について考えてみる ・多文化共生のマトリックス 日本語教育は「共生」か「同化」か ・日本語を学ぶ＝行動を変えること 行動を変えやすいものは？：必要性、便利さ、快い、と感じたとき。</p> <p>《OJT 課題》 講座を受けて、取り入れてみたいと思ったことを実践する。</p> <p>《OJT 振り返り》 実践したことを発表→コメント、感想の共有 例) ・自己紹介を実施 問いかけ方を工夫した 教師が答えすぎないように心がけた →慣れていないせいか戸惑っている学習者がいた。一回限りではなく、継続が 必要だと思った。 ・他己紹介を実施→自己開示しない学生への対応がわからなかった。特に若い 学生は決まったことしか話さないようだ。 講師からのアドバイス…好きなこと、今夢中になっていることなどを、チェーンで 質問し合うなど、リレーを取り入れるなどゲーム性を持たせるとよい場合があ る。学習者を司会者にする。教師がテンションを上げる。 ・「ほめる」をテーマに話してもらった→相手の服や持ち物をほめる程度とどま ってしまった。教師側が例を出せばよかったと反省。</p>
<p>受講者の声/ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》 ＊自己紹介の工夫について ・自己紹介というのは、聞き方を学ぶことが大事だというのは目から鱗が落ち</p>

	<p>た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表時に他の人が言ったことを聞き流さないように、急に質問するような工夫はクラス中を巻き込めて刺激的だ。 ・発話のチャンスをつかむ技術として質問の方法を学んだのは有意義だった。 <p>*さまざまな活動について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プチイベントを仕掛けると学習同士が仲良くなり、教室活動とは違った学びがある。 ・活動の目的、プロセスをはっきりさせることが重要だとよくわかった。 <p>*日本語教師の役割について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語学校と違って、「頑張りすぎない」ということが印象的だった。 ・教師対学習者ではなく、あくまでファシリテーターに徹し、学習者同士がお互いに学び合うように仕掛けていく蓬莱日本語教室のやり方が腑に落ちた。学習者との協働で教室を作っていきたい。 <p>*新たな気づき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語教育の必要性は学習者が決めることであるというスタンスを守っていきたい。 ・学習者が10人いれば10通りの解釈があり、教師が10人いれば10通りの解釈がある。固定観念にとらわれないことが大事。 ・改めて日本語教室はいつもそこにあるということが大切なのではないかと思った。（学習者がゼロになった時期もあったとお聞きして） ・今までの自分の授業は「共生」のつもりが「同化」であったことに気づいた。 ・いつか日下部先生のような地域の日本語教室が開けたらと思った。 <p>《成果と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立ち上げから今日に至るまでさまざまな苦勞の経験を聞くと同時に、「無理せず、ゆるゆるやってみましょう」という声掛けと講師の人柄にひかれ、受講者たちは自分たちの道が見えたようで有意義な講座になった。 ・OJT の実施期間に時間の余裕があるとよかった。自分のかかわる現場で、OJT の実践が困難な場合もある。
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 葉日本語教室 Facebook https://www.facebook.com/horai.nihongo/videos/504378340113548/ ・ 「地域日本語教育のシステム図」 『外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発（「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業）一報告書一』日本語教育学会（2008） ・ （公財）福島国政交流協会のホームページ http://worldvillage.org/kouryu/japan_pdf/h30_enquete.pdf

科目名	事例研究 ～（千葉）千葉市国際交流協会の事例から～／OJT 実践の振り返り
担当講師	萬浪絵理 （千葉市国際交流協会 文化庁委託日本語教育事業コーディネーター）
単位時間数	2018年度 4単位時間 講座 2単位時間 OJT 実践の振り返り 2019年度 4単位時間 講座 2単位時間 OJT 実践の振り返り
目的	地域日本語教室の現状を知ることで「生活者としての外国人」の多様性を理解し、日本語を教える際の姿勢、多文化共生の知識、目的に応じた学習内容、臨機応変に対応できる知識と技能などを身につけてもらうことを目的とする。
教育概要	千葉市の外国人住民の概要、各地の自主運営日本語教室、千葉市国際交流協会の活動事例（対話型日本語クラス）について知る。 日本語学習と相互理解の両立のための具体的な活動の進め方について考える。
内容	<p>《講座》</p> <p>①千葉市の日本語教育事業の背景、概要、特長 国籍、在留資格、年齢別割合など外国人住民概況についての説明 千葉市の日本語教育事業（千葉市国際交流協会、市民が運営する日本語教室）の大枠についての説明 千葉市国際交流協会日本語教育の目的・考え方（外国人市民の日本語力向上＋市民同士の相互理解）の説明</p> <p>文化庁の『日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)』の「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業の構想、「生活者としての外国人」に対する日本語教育人材の役割、留学生教育との違い、市民参加の日本語教室の意義などを交えながら説明</p> <p>②千葉市国際交流協会の対話型日本語クラス「テーマでつながる日本語クラス」の紹介（概要、特徴、様子など） ※千葉市国際交流協会文化庁委託事業ちば多文化協働プロジェクト Facebook 参照</p> <p>（ワークショップ）</p> <p>③対話活動をやってみる （日本語学習と相互理解の両立のための具体的な活動の進め方） テーマを決めて1人が話す→聞き手がインタビューする→聞き手がわかったことと思ったことをフィードバックする→話したことを語彙マップに表し、発話を再生する→関連語彙を広げる（自立学習支援であり、支援者はリードしないことに気をつける）</p> <p>《OJT 課題》 講座を受けて、取り入れてみたいと思ったものを実践する。</p> <p>《OJT 振り返り》 2018年度</p>

	<p>実践したことを発表→コメント 感想の共有 例) ・「年賀状」を書く→一人ひとりの個性が出るように、1年を振り返ることができる活動などを入れる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「鏡餅とおせち料理」の話題からクリスマスやお正月の過ごし方を話す→数分話したらグループで共有し、わかったことを確認しながら進む。 ・「子供のころ叱られた経験」について話す。学習者同士の質問の時間を作る。→二人で話してから全体で話すとよく話す場合がある。 ・「料理について」「日本でびっくりしたこと」をノートにメモして話す。聞き取ってわかったことをフィードバックした。→教師も入るといい。 ・マインドマップを利用して話した。 など <p>2019年度 実践したことを発表→実践者が感じた問題を共有→解決策を考える。 「好きなこと」「国の紹介」「健康法」をテーマにした対話活動</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》</p> <p>*学習者への関わり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手が言いたいことを引き出すアプローチが大切である。 ・聴く・待つ姿勢が自立学習促進につながる。 ・文法よりも伝わることを大事にする。 ・学習者同士の発表の時間を作る。 ・ニーズは自分の知っている範囲でしか出てこないのニーズに振り回されないようにすることが大切だということがわかった。 <p>*対話型活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域日本人住民が気軽に参加できる活動の必要性を感じた。 ・日本人も外国人も同じ「テーマ」に向き合い、コミュニケーションを通じて日本語の向上と相互理解を深めることができることに気づいた。 ・地域での日本語学習支援の場は社会作りにつながる感じた。 ・適応力、人間力、コミュニケーション能力が問われる。 ・もっと自分たちにできることがあるのではないか。 ・実践されている共同活動の内容がどれも面白そうだった。 ・実践例をたくさん紹介していただき、経験の浅い私にとってはすべてが新鮮で学ぶことの多い時間だった。 <p>*地域日本語教室</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政による支援状況がわかった。 ・地域の環境も理解し、日本語教育を考えなければならない。 ・日本語教室は、教室外で困った時の対応能力をつける場である。 ・国際交流から多文化共生へと認識を変えていかなければならない。 ・地域の日本語教室は居場所なのだとわかった。 ・居場所であるという感覚が高まれば、交流・国際理解・地域参加・日本語学習も高まる。 ・有償であることである程度の緊張感と責任と自覚が生まれると思う。 ・千葉市の実践の目的や具体的な活動を知り、自分も現場を知ることから始めていきたいと思った。 <p>*日本語学校との違い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様なニーズに臨機応変に対応できる知識と技能が大切だ。 ・地域の日本語教室と日本語学校では求められていることが大きく異なる。

	<ul style="list-style-type: none">・日本語学校と地域日本語教室の中間を作ったらどうか。・日本語教師は支援者とつながるようにしていくべき。
参考資料	<ul style="list-style-type: none">・「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」(文化庁審議会国語分科会)

科目名	事例研究 ～ひらがなネット株式会社の事例から～／OJT 実践の振り返り
担当講師	戸嶋浩子／吉澤弥重子（ひらがなネット株式会社）
単位時間数	2019年度 3単位時間
目的	株式会社という立場で多文化共生に関わる視点を通して、多様な形での多文化共生について考える。また実際に行われているイベントの企画体験を通して、地域日本語教室でどのようにイベントを企画・実施していくかを考える。
教育概要	株式会社として多文化共生に寄与する「ひらがなネット株式会社」の設立経緯や活動内容などの話を通じ、多彩な現場を理解する。 「ひらがなネット」で実際に行われている「町歩きイベント」の企画をするという活動を通して、地域の日本語教室でイベントを企画・実施する上でどんなことに気をつけるべきか、どのようなことに注意するかなどを学ぶ。
内容	<p>《講座》 (講義)</p> <p>①「ひらがなネット株式会社」活動内容概要 外国人と日本人をつなぐ →外国人の生活／仕事の支援 外国人と日本人の交流事業 外国人と一緒に働く</p> <p>②会社の設立当初の目標 日本での生活力を上げること 日本人の友だちを増やすこと 言葉の問題を解決すること</p> <p>③ボランティアから会社へ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「生活者としての外国人」とは ・日本語ボランティア教室の立ち上げと活動 ・日本語ボランティアの役割は？ →生活に必要な日本語を教える、生活に必要な情報を伝える ・ひとりひとり違う困りごと →幼稚園のお知らせが読めない 子どもに勉強を教えられない 買い物が難しい …など ・在住外国人のための生活サポート①料理について →「ひらがなレシピ」（外国人が読みやすいレシピの公開）をスタート 「外国人の生活教室」でスーパーで一緒に買い物をする 外国人スタッフがその国の料理教室を開催する …など ・在住外国人のための生活サポート②子育てについて →幼稚園、学校からのお知らせが読めるようにする 申請書、書類の記入を手伝う 日本の教育システムについて情報提供する 子育て中のお母さん同士で情報共有 ・在住外国人のための生活サポート③仕事について →外国人のための仕事教室

	<p>有料職業紹介事業 求職者（外国人）向けウェブサイトの提供</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ひらがなネット」の事業 ■多文化共生事業として <ul style="list-style-type: none"> 国際交流教室の企画や運営 自治体等の依頼を受け、外国人に対するインタビュー調査などを実施 自治体等向けのやさしい日本語勉強会・研修の実施 日本語ボランティア養成講座の実施 …など ■インバウンド事業として <ul style="list-style-type: none"> 自治体向け 外国人ミーティングの企画・運営 訪日外国人向けハンドブックの作成 外国人に関するガイドブック等の制作 …など ・意識していること <ul style="list-style-type: none"> →株式会社の役割 直接的な支援は支援団体に任せる 外国人の視点を入れる 気づきを「提案」する <p>④「生活者としての外国人」と仲良くなる企画とは？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人と仲良くなる企画とは <ul style="list-style-type: none"> →楽しい、外国人も日本人も対等である、新しい発見がある ★「みんなで散歩」企画の立て方 <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ散歩か？ ・コースの決め方 ・コースのつくり方 ・コースの工夫 ・下見をする ・食事 ・資料の作成 ★企画のポイント <ul style="list-style-type: none"> ・喜ぶ人をイメージする ・自分も楽しむ ・段取り 8 割、実行 2 割 ・怖がらずに 1 回やってみる ・全部自分でしようとしな <p>⑤海外活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外（モンゴル）で日本の文化紹介と交流を目的に現地で活動 <ul style="list-style-type: none"> →日本の料理紹介、現地の子どもたちと遊ぶ、現地の人と交流 …など ・準備：日本センターと連絡、イベント企画、協賛をさがす、おみやげを準備 …など <p>★コミュニケーションのヒント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本人も外国人も、一緒に楽しい ・日本ならではの体験 ・いろんな国の人がいれば、みんな日本語を話す ・絵や物を使う ・料理は言葉が通じなくてもできる ・ゲームなどで楽しく言葉を覚える ・料理などは実際に手を動かしながら言葉を覚える ・国の言葉を話してもらい、教えてもらう
--	--

	<p>(ワークショップ)</p> <p>⑥考えてみよう！作ってみよう！「みんなの散歩コース」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・モデルコース紹介 ・散歩コース作成 <p>ワークシートを使用し散歩コースを考えてみる</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 場所の設定（日時や人数などは自由に想定） 2. おすすめの場所・施設などを挙げる 3. 散歩のテーマを決める→発表 4. 発表 <p>≪OJT 課題≫ 講座を受けて、実際に企画を考えてみる。</p> <p>≪OJT 振り返り≫ 各自が考えてきた企画をプレゼンする →それぞれコメントと講師のフィードバック</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>≪受講者の声≫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語ができない＝子供との関係がうまくいかない、などの日本語の習得が家族内コミュニケーションにも関係してくることが以外だった。 ・日本の地域社会で多文化共生を進めていく中で「多文化共生」を目的とした(株)を立ち上げ、「生活者としての日本人」や「企業」に対して気づきを提供する、いうビジネススタイルがとても興味深かった。 ・困りごとに対して、何ができるのか。具体的なサポートが大切だということ。必要な情報だけを教えるだけでは不十分であること。 ・対等というコンセプトから参加者は外国人に限らず日本人も学ぶがあり楽しめる企画になるということに気づいた。 ・準備や段取りは大切だが「生活者としての外国人」たちと実行し、一緒に作り上げていくことの姿勢が大切なポイントと理解し気が付いた。 ・自分が考えていたコースは、教室がそのまま外にただけなのではないのかと、みなさんのお話を振り返りながら感じた。いつの間にか共生というより、教えてあげなければという気持ちが強くなっていることに気づかせていただいたことに本当に感謝している。 <p>≪成果と課題≫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際の活動事例を基に企画を立てることで、具体的にどのようなポイントに気をつければよいのかということを理解することができた。 ・企画作りを通して、自分本位でなく参加者目線で考えることの大切さに気付くことができた。 ・企画を通して「共同作業」を行うことで、地域の外国人との交流やお互いの理解につながることに気づいた。 ・散歩については良いアイデアだが、人集め、不測の事故への対応などもボランティア個人では限界があるように思う。どこかのボランティア組織や会社に入れば、実現可能なのかなと思う。
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・がいこくじんとにほんじんをつなぐ ひらがなネット http://www.hiragana-net.com/ ・がいこくじんとにほんじんをつなぐ ひらがなネット ひらがなレシピ

	<p>http://hiragana-net.com/recipe/</p> <p>• Google マップ</p> <p>https://www.google.co.jp/maps/</p>
--	---

科目名	事例研究 ～NPO 法人 PEACE の事例から～
担当講師	マリップセンプ（NPO 法人 PEACE 代表） 寄田恭道（NPO 法人 PEACE 日本語講師）
単位時間数	2019 年度 2 単位時間
目的	NPO 法人 PEACE の活動と日本語教室を開講した背景と思い、また日本語教室を開講する前のニーズ調査の結果をカリキュラムにどのように反映させるか、またミャンマーの学習者が楽しみながら学ぶための授業の工夫などを学ぶ。日本語を学ぶことでミャンマーの学習者の生活がどう変わったか、日本語を学ぶ大切さや意味を知る。
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ NPO 法人 PEACE とは ・ NPO 法人 PEACE の事業紹介 ・ 教育事業の概要 ・ 大人のための日本語教室
内容	<p>《講座》 （講義）</p> <p>①NPO 法人 PEACE とは 2012 年にミャンマー・少数民族を支援する団体の発足し、2013 年に特定非営利活動法人として認定。 ミャンマー連邦共和国に住む諸民族と連邦外に住む諸民族が平和で安全な生活を営なもうとする自助努力を支援するための様々な事業を実施。</p> <p>②NPO 法人 PEACE の事業紹介 PEACE の事業は教育事業を平和構築事業の 2 つの柱。 目的は 3 つ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ミャンマー・コミュニティの人々が、日本の社会の貢献できるようにする。 ・ ミャンマーの文化を配信し日本国内の多文化共生に寄与する。 ・ ミャンマー本国の民主化に向けて、海外で暮らす立場からの視点を提供する。 <p>③教育事業の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本の社会での自立を国際貢献。日本生まれの子どもとミャンマー出身の親とのコミュニケーションの円滑化 →子どもたちのためのミャンマー語教室（日本財団の助成） →大人のための日本語教室（文化庁委託事業） <p>④大人のための日本語教室 開講の背景と思い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日夜仕事に追われて日本語を学ぶ余裕と時間がない。 ・ 日本生まれの子供は成長するにつれて日本語が上達する一方親は日本語が不自由で、意思疎通が次第に難しくなる。 ・ 日本語のレベルが上がることで、職業や生活の選択肢が増えて、日本での暮らしが向上する。また、日本社会、そして国際社会に貢献できる。

	<p>対象：日本で暮らすミャンマーの難民。帰化者。就労者、留学生。 20代から70代 開催日時：毎週日曜日、17：30から19：30 クラス編成：レベル別3クラス、各講師1名とアシスタント1名</p> <p>日本語の学習内容 会話、作文、漢字が中心</p> <ul style="list-style-type: none"> ・暮らしの日本語 防災、救命体験、地震対策、交通ルール、年金の仕組み、就職へ向けての日本語 ・文化体験 餅つき、浴衣着付け、スイカ割り <p>ミャンマー・コミュニティ基盤教室の強み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・綿密なコミュニケーションにより、学習者のニーズに合うクラスが実施できる。 ・日本語学習者の希望者を募り、目指すことや学びたいことをヒヤリングを行う。 ・ヒヤリング内容をまとめ、講師とPEACEとで協議する。 ・学習目的やゴールを明確化する。 ・テキストの選定と年間プランの決定。 <p>ミャンマー留学生をアシスタントとして各クラスに配置する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通訳の役割 ・日本語教師と学習者との橋渡しをする役割 <p>修了式の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎年度、最後に修了式を実施している。その中で、学習者全員に日本語でスピーチの実施、皆勤賞の発表など次年度に学習者が繋がるような工夫をしている。 <p>受講生の変化</p> <p>3年間学習を継続している5人の子供のお母さんの変化 参加した頃は皿洗いの仕事をしていたが、2年後に大手スーパーの社員となり現在はレジを担当している。</p> <p>ミャンマーで大学の教員をしていた男性 内戦の中、地雷を踏んで足が不自由になる。日本に逃れたが精神的に不安定になる。その中でPEACEとの出会いがあり、居場所を見つける。しかし、なかなか 学習が定着せず、不安定が続いたが、日本語教室は通い続け、不安定な状況からようやく脱却できた。今は仕事にいそしんでいる。</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の日本語教室は日本語学校以上に様々な学習者が集まってくるので、先生とアシスタントと学習者間での「コーチと学習者の相互理解」が大切であると講師が何度も言っていたことがとても印象的であった。 ・何をすること・どうすることが学習者にとって一番大切なのか、多様な選択肢

の中から対応できるスキルを身に付けることが必要であると思った。

- ・ 学習者が漢字を学ぶための漢字検定のテキストが使用できることがわかった。
- ・ ミャンマーの難民の方は会話はある程度できるが、文字が理解できないことを知って衝撃を受けた。
- ・ 学習者のニーズをきちんと理解することで、適切な日本語支援が行えることを改めめて知ることができた。
- ・ 通訳のアシスタントが先生と学習者の橋渡しになる。教える側にとっても学習者さんにとって有益であること、また日本語学習が日本での生活に繋がることがよく理解できた。
- ・ 漢字を学習する際に、一方的に語彙を提示するのではなく、身近な人名、地名、駅名などあげてもらうことでより漢字が身近なものになることを学んだ。

《成果と課題》

- ・ ミャンマーの難民の方々の背景や生活するための日本語学習の必要性が理解できた。
- ・ 日本にいながらにして年金や保険制度のことなど知る機会がないこと、また日本語を学びたくても仕事を持っていると難しいことなど、日本社会が取り組まなければならない問題がたくさんあると感じた。
- ・ NPO 法人が設立され、ミャンマーの難民の方々への居場所作りや、日本語を学べる環境を作ったことなどは大きな成果だと感じた。
- ・ 漢字を学びたい人のための筆順辞典アプリの利用が有効であることを知った。

科目名	生活者としての外国人の声
担当講師	椿文緒（インターカルト日本語学校講師）
単位時間数	2019年度 2単位時間
目的	地域の日本語教室で、どのような外国人がどんな目的でどのように日本語を学んでいるか（学んだか）、また、日本語を学ぶ上での問題点や効果的だと思うことなどを知り、地域の日本語教師としての自分の活動に生かすことを目的とする。
教育概要	地域の日本語教室で勉強している（勉強した）3名の生活者の方の話を聞き、質疑応答。その後、話を聞いて気づいたこと、今後実践したいことや得られそうな成果などについて考え、グループで共有する。
内容	<p>《講座》</p> <p>①趣旨の説明</p> <p>②・Rさん（インド）にインタビュー、質疑応答 ・Mさん（ミャンマー）にインタビュー、質疑応答 ・Cさん（中国）にインタビュー、質疑応答 ～外国人の方はここで退場～</p> <p>③気づいたこと、今後実践したいこと、実践する上で考えられる問題点や成果などを各自紙に記入する。</p> <p>④受講者同士グループで共有</p> <p>《インタビュー内容》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どういう背景で日本へ来たのか。（話せる範囲で） ・ 日本へ来る前の日本語の勉強について。 ・ 日本へ来て、どの時期にどのくらいの期間日本語を勉強しているか。（したか） ・ 参加した地域の日本語教室の形態・国籍・テキストなど。 ・ どのように勉強してどうだったか。（効果的だと思ったこと、効果が感じられなかったこと、困ったことなど） ・ 地域の日本人との交流はどのようなものか。 ・ 今後、日本語を教える人に望むことなど。 <p>（※予め、外国人の方へ趣旨説明をし、インタビュー練習をした。）</p>
受講者の声／成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 複雑な思いを抱えて来日し、年を取ってから言葉を学ばなければならない気持ちに思いを寄せることができた。 ・ 英語と日本語をミックスすれば、あまり困ることなく生活できるものなのだとわかった。 ・ 地域の日本語教室に求められているのは、勉強だけでなく、安心感も大きいことがわかった。 ・ 週1回の地域の日本語教室で一生懸命勉強を続けることでN1も取得できる。 ・ 担当の日本人が長期間同じであることには、メリット・デメリットがある。

	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の力をつけるためには、マンツーマン指導が効果的で、満足度が高そうだ。 ・雑談ばかりでなく、学びたい気持ちを大切にしたい。 ・ニーズが人それぞれなので、それに合わせた準備をし、サポートしなければならないと思った。 ・漢語の使用に気をつけたい。 ・場面やテーマを使って実践したい。 ・日本人に溶け込むのに役立つトピックをc a n - d oで取り上げる。 ・日本人を作っているわけではないということを前提としたうえで、より日本で生活しやすくするために必要な知識を提供できるような取り組みをしたい。 ・日本語だけでなく、日本の文化、風習、マナーについて積極的に活動に取り入れたい。（体験する機会の必要性も感じた） ・「生活者としての外国人」と一口に言っても、さまざまな人が地域の日本語教室に来ていることを、3人の話を通して具体的に知った。 ・3人の来日背景や目的を聞き、それぞれの学習者に合わせた日本語をどのように提供できるか、地域に溶け込むにはどのようにしたらいいかなどを考える機会になった。 <p>《成果と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話していただく外国人の方には、事前に趣旨をきちんと伝えておくことと、インタビューのリハーサルは大切である。
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・弘前大学人文学部社会言語学研究室ホームページ ・『「やさしい日本語」は何を目指すか』庵功雄 他編（ココ出版） ・『＜やさしい日本語＞と多文化共生』 庵功雄 他編（ココ出版） ・『やさしい日本語 ー多文化共生社会へ』 庵功雄 （岩波新書）

科目名	2018年度 やさしい日本語 ～「伝わる」伝え方～ 2019年度 やさしい日本語 基礎編、実践編／OJT 実践の振り返り
担当講師	齋藤美幸（インターカルト日本語学校 非常勤講師）
単位時間数	2018年度 4単位時間 講座 2019年度 6単位時間 講座／OJT 実践の振り返り
目的	実際に外国人に「防災」を伝えることを課題にして、本当の意味での「やさしい日本語」とは何かを考え、相手にわかりやすい話し方のできる教師の育成を目的とする。
教育概要	①基礎編として「やさしい日本語」の実際と書き換え方法を学ぶ ②OJT の課題として、東京都発行の「くらし防災」をテキストに、外国人向けのリーフレットを作成 ③応用編として、外国人留学生に作成したリーフレットを読んでもらったり、実際にやさしい日本語を使って話したりする実践を行う *実習では観察者という立場に立つことによって、客観的に「やさしい日本語」のあるべき姿を見る機会を設け、気づきを促す。
内容	<p>《講座》 （講義＋ワークショップ） 第1日目 ①外国人事情「日本語の学習を必要としている人」とは ②「日本語を学習している人」から見た日本語の特徴 ③「やさしい日本語」歴史的背景と現在 ④単語、文、少し長めの文章について、練習（ペアー、グループワーク） ⑤話す、聞く時のポイント提示、練習（ペアワーク） ⑥OJT の課題説明 身近なお知らせ等をやさしい日本語に換え、次回留学生に読んでもらうためのリーフレットを作る。</p> <p>（ワークショップ） 第2日目 ⑦OJT の発表 ⑧外国人留学生と実践（グループワーク） グループの形：3人1グループ3（留学生＋実践者＋観察者） 時間配分：20分×3回（3人の違うタイプの留学生とワークをする） ワークの内容：①書き換え リーフレットを読んでもらい、わかりやすいところやわかりにくいところを留学生に指摘してもらう。 ②言い換え 『くらし防災』の「備蓄」について説明する。 ⑨振り返りシート記入</p>
留学生と実践の際の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークに集中できるように、1つの教室に1グループとなるように分かれた。3人の留学生と実践するために、留学生だけが教室を移動。 ・通信での受講者とは、テレビ画面を通して実践。応答に多少の時間差があるが、慣れれば対話ができるようになる。留学生のほうが、画面越しの対応が上手だった。

<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「どうして」を伝えるということにハッとしました。今まで、具体的な「どうして」をはっきり伝えていなかったことに気づきました。 ・何かを説明しようとする、思った以上に名詞を修飾してしまう思考になることも痛感しました。 ・やさしい日本語は日本語が不慣れな外国人対象のものだけではなく、日本語母語話者にとってもわかりやすく伝えるための大切なポイントがいくつもあるとつくづく実感した。 ・日常の中で時間があるときに気になった単語を簡単な日本語に言い換えるような練習を（ちょっとしたゲーム感覚で）しておけば、頭が柔らかくなっていざという時に言葉がスムーズに出てくるような気がするので試してみたい。 ・やさしい日本語を使うということだけではなく、その行動の裏にある意味をきちんと伝えなければ、命にかかわる場面では意味がないということがわかりました。 ・これまで「やさしい日本語」は子ども（日本人）がわかるような単語、表現を使えばわかるだろうと勝手に思っていました。外国人にとっては、そのこと自体を国に存在していないものもあるので、ではその場合はどうしたらいいのか、とても考えさせられました。 ・豊かな発想や機転、柔軟で臨機応変な対応、習慣の違いを考慮する、思い込みを排除する…、いろいろあつて消化しきるのに時間がかかる。でも、笑顔を忘れないようにしたい。 ・「できること」「できないこと」、「してもいいこと」「よくないこと」など、伝えたいことの両面を言うとのことの大切さを知った。 ・伝わるための工夫をしているつもりでも、私は一方からの視点で考えがちだということに気づきました。先生の指摘や受講している方々のアイデアを伺って、いろいろな視点から考えることができると痛感しました。日本語教室でもともに学ぶことの楽しさを感じてもらえるようなレッスンを目指そうと思いました。 ・目の前に相手がいて話して伝える場合はよいが、対象者が広い場合の「書き換え」はいろいろ疑問点が出てきた。「やさしい日本語」は難しい。 <p>《成果と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・OJTとして、現場に持ち帰って、「やさしい日本語」を即実践できた。 ・観察者になることによって、「自分はどうしよう」というポイントが具体的になり効果が大きかった受講生がいた一方で、観察者役の時に、つい横から口を出してしまう受講生もいた。観察者になる意義の理解を徹底させることが必要。
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・弘前大学人文学部社会言語学研究室ホームページ ・『「やさしい日本語」は何を目指すか』庵功雄 他編（ココ出版） ・『＜やさしい日本語＞と多文化共生』 庵功雄 他編（ココ出版） ・『やさしい日本語 ー多文化共生社会へ』 庵功雄 （岩波新書）

科目名	2018年度 さまざまなアプローチ② ～学習者の言いたい気持ちを大切に～ 2019年度 たくさん話す工夫② ～語彙からのアプローチ～
担当講師	齋藤美幸（インターカルト日本語学校 講師）
単位時間数	2018年度 6単位時間 2019年度 4単位時間
目的	学習者の言いたい気持ちを大切にしつつ、たくさん話してもらう工夫が必要だが、一つの方法として「語彙」からのアプローチについて考える。 ①語彙の学習について考える 語彙のテキストを用いて発話を促し、学習者の言いたい気持ちを大切に語彙の学習につなげる指導法について考察する。 ②教室活動について考える 教室での話題の作り方や話の展開方法など明日から使える教室活動を考える。また、学習者の持続的な学びにつなげることを意識する目を養う。
教育概要	『きらり☆日本語 語彙』（N5, N4, N3）の構成や内容、練習問題から、語彙の学習について考える。実際の教室ではどのような活動ができるか、効果的な語彙の学習について考えたのち、ロールプレイを行い、検証、考察、共有する。
内容	<p>《講座》 （講義）</p> <p>①日本語教室に来る学習者の様子を紹介 宿題を一緒にやる子、漢字を一人で黙々と書く子、『みんなの日本語』での学習を希望する夫婦など。</p> <p>（ワークショップ）</p> <p>②まったく知らない言語を学習する体験 初級授業の1例をネパール語で実施</p> <p>（講義）</p> <p>③『きらり☆日本語』紹介 テキストの構成、コンセプト、内容、実際の授業での使用法などを紹介 練習問題体験（グループ内で実施、クリティカルに感想述べ合い、共有）</p> <p>（ワークショップ）</p> <p>④テキストを用いてロールプレイ 対象：「少し知っている学習者」に設定 話題：N5「4. 食べ物」 N4「1. 健康」 N3「3. 心～感じる・気持ち～」 ロールプレイの方法：1. グループで教室活動の方向性を検討（15分） 2. 別のグループへ行き、学習者役を相手にロールプレイを実施（15分×2回） 3. 情報共有 元のグループに戻ってきて報告 4. 振り返りシート記入</p>
受講者の声／ 成果と課題	《受講者の声》 *テキストについて

- ・語彙のテキストを初めて見た。語彙のテキストなのに「話す」「書く」活動もあり使いやすかった。会話の練習もできる。
- ・ボランティア教室で使っているテキストだが、今回コンセプトを聞くことができ、使い方のイメージがさらに広がりました。受講者の方々のアイデアも取り入れていきたいと思えます。
- ・巻末に英訳しかありませんが、ベトナム語と中国語も入れてほしいです。
- ・自らの語学学習の体験を顧みるとこの辞書のような「生活で使えるような言葉や表現が満載」のテキストは、「生活者としての外国人」に必須であろうと思えます。

* 話題について

- ・「食べ物」は話が広がり、とてもよい。
- ・「健康」はとても難しいと思った。症状についてどう説明したらいいか苦労した。
- ・「健康」は、難しいがとても大切。話が具体的にあってよかった。
- ・「気持ち」を表現するのは、適切な場面が必要だということがわかった。

* 活動、活動の際の態度等について

- ・たくさん話してもらおうとして、根掘り葉掘り聞くようになってしまったので、今後は気をつけようと思う。
- ・つい待つことを忘れてしまい、一方的に話してしまう自分に気づいた。
- ・「教えなきゃ」という気持ちが先行してしまった。相手には「圧」だったかも。
- ・相手のことだけを聞いても広がらない。今後は周りの人や物に目を向けたい。
- ・テキスト内に語彙が多いので、話が散漫になってしまった。
- ・グループで相談した方向で進めたが、もっと1体の具体的な話にしたほうがよかったと反省。
- ・一問一答の応答にこだわりすぎていた。もっとテキストのイラストを有効活用したり、グループピングをさせたりする活動を取り入れれば語彙が増えたと思う。
- ・支援者が聞き役になることを同感した。日本語教室を「話せる居場所」「楽しく過ごせる時間」となるように今後頑張ります。

- ・「テキストを教える」のではなく、「テキストで教える」ことの大切さを再確認しました。
- ・難易度の低いものから順に積み上げていくことが第二言語習得の伝統的なやり方だが、学習者自らが話したいと思ひ。そのために必要な語彙を習得していくという発想は素晴らしいと思った。
- ・生活の日本語だけで学習すると、活動のその時間だけ日本語を学習し、1週間たつとすっかり忘れてしまうことが多いです。日本語の学習に時間を割くことが困難な学習者が多いですが、日々ちょっと時間が持てたときに問題を解いてみようと思ってくれたらいいなと思いました。
- ・文字の学習なしでも日本語学習ができると聞いて、いつもひらがなの読み方に続いて書き方をやっているのが正しいのか、まずは言いたいことを口頭で表現できる方を優先したほうが多くの学習者さんにとって有効なのではないかと考えが広がった。教室では、先を急ぐあまり、繰り返しが足らないのではないだろうか。こちらの頭の中にある目標を意識しすぎて、きちんと学習者さんに寄り添えていなかったように感じた。

	<p>《成果と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りシートにたくさんの感想が寄せられたことら、今回の研修では気づきが多かったことがわかる。テキストの使い方例や同席した受講者のやりかたを実際に見ることで自分の普段の活動を客観視することができたようだ。 ・本研修のねらいどおり、テキストの練習をヒントに、自分なりに工夫した活動を考えた受講者が散見された。 ・実際に普段自分がどのような活動をしているかを紹介し合う時間を単独で取ればよかった。4単位時間では足りなかった。
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『きらり☆日本語 語彙』 N5, N4, N3 齋藤美幸ほか (凡人社) ・『類語国語辞典』 大野晋 浜西正人 (角川書店) ・『外国語学習に成功する人、しない人 第二言語習得論への招待』 白井恭弘著 (岩波書店) ・『旅の指さし会話帳』 (ネパール語、ベトナム語) (情報センター出版局)

科目名	会話を引き出す教授法① ～ことばのキャッチボール～
担当講師	椿文緒（インターカルト日本語学校講師）
単位時間数	2018年 2単位時間
目的	同日の講座「やさしい日本語」を使って、理解しやすい言葉でコミュニケーションを取る。日本語教師が一方的に教えるのではなく、学習者が言いたいと思っていることを引き出す。話の聴き方に焦点を当て、聴き手としての自分の活動を振り返り、今後の教室活動に生かすことを目的とする。
教育概要	話しやすく、人間関係を作りやすい話題、例えば、「好きなもの、好きなこと、好きな所、好きな人」について聴く。 話を聴く側の態度として「相槌を打たないで無表情に」「話の途中で思いついた話をする」などの相手の話の聴き方を体験し、感じたことを共有する。 形式：ペアワーク、グループワーク
内容	<p>《講座》 (ワークショップ)</p> <p>①「好きなもの、好きなこと、好き所、好きな人」を各自書く。</p> <p>②「好きなもの」についてペアで話す。(自由に) →感想を言う。</p> <p>③「好きなこと」についてペアで話す。(聴き手は「相槌を打たないで無表情で聴く」) →感想を言う。</p> <p>④「好きな所」についてペアで話す。(聴き手は「話の途中で質問したり、思いついた話をどんどんする」) →感想を言う。</p> <p>⑤「好きな人」についてペアで話す。(「相槌を打ちながら、やさしい日本語で相手の話を確認しながら聴く」) →感想を言う。</p> <p>⑥話しやすい話題についてグループで案を出す。→全体でシェアする。</p> <p>⑦ペアになり、考えた話題で話す一人はたどたどしく話す学習者役で、もう一人は教師役になり、相槌を打つ→学習者の言葉を確認する→発話にする→学習者に書かせてもう一度言わせる、という流れでやってみる。 (1回ずつペアを変更した)</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一つの質問からいくらかでも話を広げることができると気づいた。 ・会話においては、聴き手のほうが役割が大きいと感じた。 ・表情や相槌のありなし、繰り返しが大切であることを再認識した。 ・相手が話しやすい雰囲気を作るのが大事だ。 ・話せた、聴いてもらえたという満足感を持ってもらうことの大切さに気付いた。 ・学習者にも、聴いているというサインのうなづきを伝えたい。 ・相手の話を遮らず丁寧に聞きたい。 ・日本語のレッスンだけでなく人と人とのコミュニケーションに有益だと思う。

	《成果と課題》 ・ Web の方で、途中、音声途切れたところがあったようだ。
参考資料	・ 『にほんごボランティア手帖 すぐに使える活動ネタ集』米勢治子（凡人社）

科目名	会話を引き出す教授法② ～ことばのキャッチボール～
担当講師	椿文緒（インターカルト日本語学校講師）
単位時間数	2018年 2単位時間
目的	<p>①日本語がゼロの学習者とコミュニケーションを取りながら自己紹介をし、学習者に合わせて話題を広げてみることを目的とする。</p> <p>②学習者の経験を話してもらうことから、話題を深めたり広げたりして、相互理解をしていく体験を試みる。前回の講座での、話に相槌を打つ、確認しながらよく聴く、という点に気をつけ、さらに、学習者の言葉を正しい文にして書かせ、言わせるところまでをやってみることを目的とする。</p>
教育概要	<p>①日本語がゼロという学習者と日本語教師の初対面でのやり取りの映像を見て、どのような問題があるか考える。コミュニケーションをとりながら自己紹介をする方法を考え、やってみる。その後フリートークへ発展させる。</p> <p>②「～たことがある」の文型を使い、話してみる。</p>
内容	<p>《講座》 (ワークショップ)</p> <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本語がゼロの人とのやり取りを考える。 1分程度の映像（日本語がゼロの人と日本語教師の自己紹介の場面）を見て、どのような問題があるか気づいたことを出し合う。 （映像は、語彙コントロールやジェスチャーもなく、一方的に日本語を「教えている」もの） コミュニケーションを取りながら、意味を理解させて使えるようにする自己紹介をペアで考え、発表し、気づきを共有する。 その後、学習者の国から連想される有名なものなどの話、来日した月から季節、天気の話、今住んでいるところから店の話、食べ物の話など、話をどのように広げられるかを具体的に考える。 日本語学校では、月を教える時に、月の数字は一度に教えるが、少しずつ必要なものから教え、まとめて全部教える必要はないこと、日本語学校でよくする「いつまで日本にいますか」という質問や家族についての質問が適切ではない場合があることなどを確認。 また、学習者にきちんとした構文で話させることにこだわりすぎのではなく、初日に、来てよかった、話せた、楽しかった、また来たいという気持ちになってもらうことも大事だということを確認した。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> 受講者にA4の白い紙を配る。 受講者は、大きい○を7つ書き、その中に、「～たことがある」を使って話しやすい動詞を1つずつ、全部で7つ書く。（食べる、飲む、行く、見るなど） →7つの動詞に0～6の番号を振る。 受講者にやり方の説明をする。（学習者と日本語教師がペアで、じゃんけんのように指を0～3本出し、二人の合計の指の数の番号の動詞で経験を話す。） 偶然の話題で他意はないということを確認。 (1回目)ペアになり、やってみる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・(2回目)ペアの1人は学習者役で、少し日本語をたどたどしくし、教師の方は、相槌を打ち、相手の話を確認しながらよく聴くというところを意識し、やってみる。 ・(3回目)ペアの学習者がうまく言えなかったことを教師が正しい文にして、書かせて言わせてみる、というところまでをやってみる。(すべてではなく必要なものだけを書かせる) ・やってみた感想を共有する。 ・教師が質問するだけでなく、学習者からも質問してもらうこと、正しい文で言う→書かせる→言わせることで、外でも使えるようにすること、教材を持ってこなくても、白い紙が1枚あればできることなどを確認した。 <p>《OJT課題》 現場に合わせて、それぞれやってみたいと思ったことを実践してみる。</p>
受講者の声／ 成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「～たことがある」を使って正月の経験を話した。自分のことを話すのでいつもより発話が多く、コミュニケーションが活発になった。 ・教師が正しい日本語で発話の形にして、学習者に繰り返してもらうことで、お互い安心感を持ちながら会話が続けられた。相手も聴く姿勢を持って接してくれたように感じる。 ・「好きなもの、好きなこと」についてやり取りを続けることを目標に取り組んだ。料理の話では、相手が生き生きと話し、教えてくれた。「～て、～て」を使って書くことなども実践したいと思った。学習者さんが日本語で自国のレシピを仕上げられれば、満足感と達成感を得られるのではないか。 ・「好きなもの」はキャッチボールがしやすく、学習者が明るい表情で話した。また、話をいろいろなところに発展させることができた。生活に役立つことは、学習者から質問が来た。学習者が質問できてよかったと感じているようだった。 ・学習者に興味のある話題だと学習者に主導権を持たせることができる。 ・学習者に合わせたトピックを考えるのは簡単でも、そのためのレアリアや教材を探すのは物によっては手間取るだろうと考える。 ・多少のまちがいはその都度直さず、これだけは、というものは正しく言い換え、忘れないように書かせてもう一度言ってもらい、できたらほめる。来日10か月の学習者だったので、「～たことはありません」というものが多かったが、「でも、いつかしたいです」という表現につなげると学習者さんも喜んでいた。

科目名	さまざまなアプローチ③ ～学習者の言いたい気持ちを大切に～
担当講師	椿文緒（インターカルト日本語学校講師）
単位時間数	2018年 4単位時間
目的	地域の日本語教室が、文型積み上げ方式で行う場合もある。その場合、使用するテキストは文型積み上げでも、日本語学習＋相互理解ができるよう、学習者に合わせたアプローチを考え、実践してみることを目的とする。
教育概要	様々なタイプの学習者を想定し、「～たことがある」の文型を、学習者の話でやり取りをしながら導入する。（以前の講座「会話を引き出す教授法 言葉のキャッチボール②」の中で、「～たことがある」を使って話題を広げたり深めたりする練習をした） 他に「～くなる」「～になる」、「可能形」、「～ずにはいられない」の文型を、学習者の話でやり取りをしながら導入する。
内容	<p>《講座》 （ワークショップ） ★受講者は様々なタイプの学習者を想定しておく。</p> <p>①「～たことがある」</p> <ul style="list-style-type: none"> 講師が受講者に、やり取りしながら導入するというのをやってみる。 例) 富士山の話。流れとしては「富士山の上はきれいか」「わからない」「どうしてわからないか」「のぼったことがないから」というもの。他に、ディズニーランドや熱海の温泉などの話題で導入。（話題を次々提示するのではなく、自然に話を広げたりし、コミュニケーションをしっかりとりながら進めるところに気をつける） 意味、形、応答の仕方など気をつける点の確認。 グループで、想定した学習者に合わせた教案を作り、発表→気づきの共有 <p>②「～くなる」「～になる」、「可能形」、「～ずにはいられない」</p> <ul style="list-style-type: none"> 例文を挙げる。意味、形、文法の制限など注意することの確認。類似表現を考える。 グループで、どんな話題ができるか話し合い、学習者とやり取りをしながら導入する教案を作り、発表→気づきの共有
受講者の声／成果と課題	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> 文型積み上げ型でも、一方的に教師側からレクチャーするのではなく、会話の中から学ばせたい文型を言わせるように導く。その方法を具体的に体験できて、勉強になった。 自然な導入、学習者にとって身近な導入、すぐ使えるような導入を考えたい。 導入の流れが勉強になった。 導入から応用まで、作り方がわかった。 「学習者の言いたい気持ちを大切に」というのは具体的にどういう授業をするということなのか、少しずつ分かってきたように思う。 学習者を言いたい気持ちにさせるために、的確な質問をすることが重要。 色々な文型の導入について役立つことを学べてよかった。 グループワークがよかった。色々な見方があって勉強になった。

	<ul style="list-style-type: none">・ 同じ文型でも、グループそれぞれ違う方法だったので、新しい発見があった。実際の授業で取り入れてみようと思う導入もあった。・ can-do型授業と文型積み上げ型授業の組み立ての違い、目的の違いがはっきりわかってよかった。・ 文型積み上げ型授業もやり方によっては地域日本語教室でも使えるということがわかった。
--	---

科目名	2018年度 さまざまなアプローチ① ～学習者の言いたい気持ちを大切に～ ／OJT 実践振り返り 2019年度 たくさん話す工夫① ～can-do を用いたアプローチ～ ／OJT 実践振り返り
担当講師	坂本舞（インターカルト日本語学校講師） 秋山信子（インターカルト日本語学校講師）
単位時間数	2018年度 4単位時間 講座 2単位時間 OJT 実践の振り返り 2019年度 4単位時間 講座 2単位時間 OJT 実践の振り返り
目的	文型積み上げで教えている日本語教師が多い中、can-doの考え方を確認し、実践 してすることで、地域日本語教室での学習者に合わせた対応を身につけてもらう ことを目的とする。
教育概要	『WEEKLY J』（凡人社）のテキストを元に、can-doの考え方、授業の組み立て方 を例を挙げて紹介する。 実際に授業を組み立てる過程を体験し、共有する。
内容	≪講座≫ （講義） ①Can-do形式の授業について、意義や方法を文型積み上げの授業との違いに触れ ながら説明する ②授業のポイントについて説明する ・学習者が話したい伝えたい(聞きたい)気持ちにさせる ・自分のことが言える など ③『WEEKLY J』のテキストからトピックを1つ取り上げ、全体で、授業の組み立 て方を考える。 ゴールを確認し、例文（文型）を挙げる。→言いたい気持ちを引き出す投げか けをし、学習者に日本語でうまく言えないという躓きを感じさせてから導入す る。→関連する聴解、語彙・文型の確認をする。→もう一度話させ、最後に書 かせる。という過程を受講者全体で考える。 （ワークショップ） ペアワーク ・「日本へ来てから変わったこと」 ・「好きな場所を紹介する」 どちらかのトピックに決め、ペアで授業の組み立てを考える 発表→フィードバック→共有 ≪OJTの課題≫ Can-do形式を取り入れて実践してみる ≪OJT振り返り≫ 2018年度受講者の実践発表＋フィードバックと共有 「国のおすすめの場所・ものが紹介する」

	<p>『WEEKLY J』Unit16「送ってくれてありがとう（うれしかった思い出を話す）」 「健康と病気の話をする」（マインドマップを使った）など</p> <p>2019年度受講者の実践発表＋フィードバックと共有 「冬休みの予定を話す」 「病院で簡単な病気の症状を言う」 「日本で何がしたいか」など</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストレートに聞くのではなく、学習者が話したい、伝えたいという気持ちにさせるように話題を構築することを心がけたい。 ・答えを引き出すための会話力、質問力を鍛えなければと思った。 ・すべての学習において、Can-do を実感してもらってその日の学習を負えるのが望ましい。 ・聴く技術も必要で色々なバリエーションを練習する必要があると思った。 ・学習者があまり積極的でないのは、話したい気持ちにさせ、つまづきを感じさせるというのが足りていなかったからだということがわかった。 ・話したい気持ちにさせるための具体的なヒントを出すことが大切だ。 ・文法を広げて練習する必要があることがわかった。 ・見たことがあるテキストだったが、先生の解説とともに考えることで、自分に見えていなかったことの多さを知ることができた。 <p>《OJT の感想》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既習の表現を使って「できる」につなげる段階で時間を取られた。色々な形で復習を行わないと、学習者の気づきにつながらない。 ・導入部分で通常よりもていねいに状況や心境を共有化することで発話が増えた。 気持ちを共有することの大切さを学んだ。 ・ガチガチの勉強ではなく、楽しく会話力を向上させることができ、学習者の自信にもつながると思った。
<p>参考資料</p>	<p>『WEEKLY J book1 日本語で話す6週間』加藤早苗（監修）、秋山信子、坂本舞（凡人社） 『WEEKLY J for Starters1』加藤早苗（監修）、秋山信子、坂本舞（凡人社）</p>

科目名	教材作成 ～その場でできる教材づくりのコツ～
担当講師	深田みのり（インターカルト日本語学校 講師）
単位時間数	2018年度 2単位時間
目的	短時間で、相手に伝えたいことが伝わるイラストを描くコツを身に着ける。 また、絵を描くことへの苦手意識からの解放。 「その場でできる教材は、コミュニケーションの可能性に満ち溢れている」ことを実体験する。
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> ・「5秒で描ける！伝えるイラスト」の心構え ・線や図形を使って描くコツを知る ・表情、動作、状況の描き分けのコツを知る ・イラストを活用した授業体験
内容	<p>《講座》 （ワークショップ）</p> <p>①「5秒で描ける！伝えるイラスト」の心構え</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本研修ではたくさん描く、人に見せる、人の描いた物を見る ・絵を描くことが好きか嫌いか。禁句は「上手ですね」 ・何か言いたかったら、「いいね！」「おもしろい！」「わかる！」と言う ・本研修で描く絵は、自己表現ではなくコミュニケーションのための絵 ・「上手でなくても伝わればいい」ということを意識する <p>②線で遊ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「楽しいこと、いやなこと」をそれぞれ思い出しながら、自由に線を描いて見せ合う <p>③図形を利用する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・○や△や□を使って、テーマの絵を描く→見せ合う ・図形を利用すると、簡単に、素早く描ける。特徴さえ捉えていれば、それらしく見える ・日頃よく見ているものは意外と描けることに気づく <p>逆に、身の回りの物でも案外わかっていないことに気づく</p> <p>④マンガのパーツを使って人の表情を描き分ける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年齢、性別、顔の向き、表情の描き分けをする→見せ合う ・シワやほうれい線、髪型、鼻の位置、口の形、汗、動きを表す線など、ちょっと加筆するだけで人の顔を描き分けることができる <p>⑤人の動作を描き分ける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頭と胴体の絵に、どのように手足をつけるかによって、人の動作を描き分けることができる。更にマンガのパーツを加筆することによって、人の状態や気持ちまでも描くことができる <p>⑥状況を描き分ける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・④と⑤に加え、背景や服装、小物を加えることによって、場面や状況を伝えることができる。この時大切なのは「伝えたいことは何かを考える」こと。それによって描くべきポイントを絞り込める。つまり、ムダに描かなくて済む

	<ul style="list-style-type: none"> ・ムダに描くと情報ばかりが増えてわかりにくい。まず、「それを伝えるために本当にイラストが必要か」ということから考えるべき <p>⑦手描きイラスト技術の活用例紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意味が似ている形容詞の違いを伝える 例) 「悲しい」と「寂しい」、「嬉しい」と「楽しい」 ・受身、使役、使役受身、「～てもらおう」の違いを伝える ・文字や漢字学習で活用する <p>⑧イラストを活用した授業体験（4人1グループ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「話しかける」「デートする」「ケンカする」「別れる」の絵を1人1つ担当し、1分で描く ・即興で4コマのストーリーを作る→発表する。 <p>⑨まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「伝えるためのイラスト」6カ条 <ol style="list-style-type: none"> 1. 上手さではなく、伝わること 2. 力を抜いて、遊び心を持って、楽しんで 3. 対象を観察し、特徴をとらえる 4. 余分なことは描かない 5. 手早く 6. 描くことに慣れる ・教材をつくる前に考えよう その絵は本当に必要？ 何を伝えるための絵なのか？ 最小限、何を描くべきか？ ・イラスト上達のコツ 「自分が得意なこと」の秘訣は、そのまま「イラスト上達」につながる 本研修「イラストが描ける体験」は、日本語学習者の心理に通じるものがあるといえる
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しく興味深い時間だった。 ・絵を描くことに対する苦手意識がとれた。 ・上手下手の問題ではなく、きれいに書くことよりも特徴をつかむことだと思った。 ・「『上達の秘訣は、自分がわりと得意だと思うことを考え、その秘訣を考えること』というのは大きな収穫だった。私は大きな声を出すことに抵抗がなく、その秘訣は恥ずかしいと思わないこと。だから、イラストを描く時も、恥ずかしいという意識は捨てて、まずは楽しんで練習することから始めてみようと思った。 ・伝わるために余分なことは描かないというのは、学習者に話す時の注意点と同じだと思った。 ・伝わるイラストを描くために、対象物の特徴をとらえたり、伝えたいことは何かをきちんと意識したりすること、本当にそれが必要なのかを見極めることは大事だと思った。 <p>《成果と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講座で使用したアプリ「MetaMoJi Note」への関心が高かった。 ・絵そのものの有用性についても複数意見があった。

	<ul style="list-style-type: none">・「絵は世界共通言語」と話したことに対して「国や文化によって同じイラストやしるしが異なる意味になるものもあるのではないかと気になった。使用する時に配慮が必要かもしれない」という意見があった。このような配慮は常に必要である。配慮とチャレンジ精神は共存する。絵を見ても通じない、あるいは誤解が起きた時は、失敗と思わず、それを対話のきっかけとしたい。
参考資料	<ul style="list-style-type: none">・『○△□ではじめるイラスト事典』長尾映美（池田書店）・『絵を描いて教える日本語』永保澄雄（創拓社出版）・『くらしを彩るカラーペンでかんたんイラストBOOK』eto（朝日新聞出版）・『頭が良くなる「図解思考」の技術』永田豊志（中経出版）

科目名	教育実践のための技能
担当講師	深田みのり（インターカルト日本語学校 講師）
単位時間数	2019年度 4単位時間
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・ レベルチェック・ニーズ分析・評価に焦点を当て、生活者としての外国人支援に、どう日本語教育技能が生かせるかを考える。 ・ 教育技能の自己研鑽の必要性について認識を新たにし、いくつかのワークを通して気づきを体験する。
教育概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生活者としての外国人支援における日本語教育技能の意義 ・ 何のためにレベル分けをするのか／レベルチェックの方法 ・ ニーズ分析の意義／初対面時のニーズ調査／常にニーズを知ろうという姿勢 ・ 評価は必要か／学習目標につながる評価 ・ 教育技能の自己研鑽
内容	<p>《講座》 （講義）</p> <p>①生活者としての外国人支援における日本語教育技能の意義 日本社会で生活する外国人には、生活者としてのニーズと日本語学習者としてのニーズがある。後者で特に求められるのが日本語教育的技能である。生活者としての外国人学習者は非常に多様であり、一律的な教育は相応しくない。個々の能力とニーズに合った日本語学習によって生活の質を上げていけるような支援が望ましい。そのためには、幅広い視野に立ち、臨機応変に対応できる日本語教育技能が必要となる。</p> <p>（ワークショップ）</p> <p>②レベルチェック 一般的に使われているレベル分けの基準には、どんなものがあるか考える。 （JLPT、SEFR、「初級」「中級」「上級」（「参考資料」の項参照）など）</p> <p>[ワーク1] 実際に学習者を迎えた時、何のために、どんな基準でレベル分けをしているか考え、話し合う。</p> <p>グループレッスン形式の教室では、グルーピングの際に日本語レベル以外の部分でも様々な配慮が必要になる。また、学習者個人においても四技能のバランスがよいとは限らずレベル設定が難しい場合がある。 教師には、日本語能力レベルについての客観的基準を持っていること、それとともに、現場に合わせた臨機応変さの両方が求められる。</p> <p>③ニーズ分析 学習者が日本語を使って何をしたいか、目的のためにどんな日本語能力が必要か、そういったニーズを教師が知り、分析することは、学習目標の明確化、教室活動プランの作成、学習者のモチベーション向上につながるため、非常に重要である。</p>

●初対面時のレベルチェックとニーズ調査

一般的に質問票への記入とインタビューが行われる。これは来室者の管理だけでなく、レベルやニーズを知るために必要な情報源となる。

[ワーク 2]

各々の現場で初対面時に行っていることを聞き合い、より良い方法を考える。

●常にニーズを知ろうという姿勢

学習者のニーズは変わっていくものである。また、学習者自身が気づいていないニーズもある。普段の活動の対話の中で、学習ニーズ見つけ、掘り起こしていくことが大切である。それによって学習目標が明確になり、モチベーションが向上する。

[ワーク 3]

ペアで学習のふりかえりの練習をする。学習者役と教師役になり、学習のゴール、今できるようになったこと、これからやっていきたいことなどを教師役が質問し、学習者役が考え、答える形で進めていく。

これは手法の一例にすぎないが、大切なのは、学習者が主体的に行えることである。自身の気づきによって目標が明らかになり、学習を続ける意欲が増すことをねらいとしている。教師はそのための場をつくり、促す役である。

定期的に、あるいはタイミングをみて行うことが有効である。

(講義)

④評価

いわゆる学校ではない学びの場では、成績表や定期テストのような義務化された評価は必要ない。しかし、評価は、学習者が自分の能力を俯瞰し、達成感を得て、次のステップに進むエネルギーを得る機会をつくるものでもある。

例えば、[ワーク 3]のような振り返りは、学習者が主体的に自己評価する機会になっている。自分ができるようになったことを確認し、足りない部分やさらに上達したいことを考えるのは、次の学習につながる。このようなかたちの評価活動を現場に取り入れていくことは有効と思われる。

(ワークショップ)

⑤教育技能の自己研鑽

1. 情報収集力と提供力

- ・社会や日本語教育界の動向、新しく開発された教材、教育実践についての情報を積極的に得て、アップデートしていく。
- ・教師や支援者間で情報交換や学び合いをする場を作る。

2. 教材作成力

- ・学習者に合う教材を探し、アレンジし、作成するスキルを磨く。
- ・教室で使うだけでなく、学習者の自立学習を促すツールという視点で教材を捉え、工夫する。

3. コミュニケーション力

- ・聴く力、質問力、説明力の3つをトレーニングする。

[ワーク 4]

説明力のトレーニング。テーマを決め、30秒～1分くらいの短い時間でスピーチする。

	<p>簡潔に分かりやすく話す技術は教師に求められる大切な技能である。話のポイントを絞り、伝わりやすい構成を考えて話すことは日頃心掛けるだけでなく訓練も必要である。ミニ研修のような形で、教師をはじめ支援に関わる仲間同士で行うと、良い学び合いの機会になると思う。</p> <p>(講義)</p> <p>⑥まとめ</p> <p>外国人生活者は多様であり、個々の学習ニーズに合った支援をしていくことが重要である。適切なレベルチェックを行い、日々の対話の中でニーズをつかみ、学習支援に反映させていきたいものである。</p> <p>また、必要なタイミングで学習の振り返りを行うことは、学習者が自身の日本語力を見つめ、次の目標を持つ機会になる。学校とは違って終わりのない学びが求められる生活者の学習支援において、このような評価活動はモチベーションを継続させるひとつの有効な手段だと思われる。</p>
<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ニーズ分析は、教師主導よりむしろ学習者が主体的にやることで自身の立ち位置を明確にすることができる。そのためには教師側も「待つ」「引き出す」能力が求められることがわかり、「受容」「共感」の姿勢が重要であることを実感した。 ・ 短い時間でスピーチする練習は、やさしい日本語で短くまとめる訓練にとっても有効。必要最低限の言葉を厳選する能力は、大変重要なスキルである。 ・ 支援者としての引き出しをたくさん持ち、自己研鑽を忘れないようにしたい。 ・ 支援者同士の学び合いの機会も積極的に作っていききたい。 ・ レベルチェックの判断材料を自分が持つために N1～N5 の問題集を自分でやってみようと思う。 <p>《成果と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 経験のある初任者を対象にした教育技能の研修は、講師からの一方的講義より、ワークショップやディスカッション形式の方が有効であることを実感した。特に受講生の学び合いや気づきの能力が高い場合、得るものが非常に大きくなる。
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 『日本語教授法シリーズ 10 中上級を教える』国際交流基金（ひつじ書房）

科目名	外国語としての日本語文法
担当講師	沼田宏（インターカルト日本語教員養成研究所 所長）
単位時間数	2018年度 4単位時間
目的	文法の知識の必要性を再確認する 日本語能力試験の新傾向を知り、効果的な指導のためにはどのような文法知識が必要かを考察
教育概要	<p>①文法の知識の必要性の理由 学習者の誤用を分析しやすくなる 誤用訂正の根拠が明らかになり、確信をもって指導できる</p> <p>②日本語能力試験の新傾向 普段あまり使わないような表現は出題されなくなった 教科書の中で指導項目として取り上げられていない部分にも注目したい 複数の文法項目が複合的に使われている。</p> <p>③新傾向への対策 練習問題を解くことで身に付くものではない 会話の中で習得し、使えるようにしていくことが望ましい</p>
内容	<p>《流れ》 （講義）</p> <p>①学習者に質問されたらどうするか 1. 助詞の問題点 場所のあとにつく「で」と「に」の注意点 「…が～たいです」か「…を～たいです」か 2. 品詞と活用の問題点 「食べられません」「違かった」 学習者が教科書と違う形を使ったらどうするか（「私は日本人じゃないです」など）</p> <p>②学習者の発話 ・「今、来ています。さっき駅を出たそうです」 ・「安かったんですから、スーパーで買い物しすぎてしまいました」 →「～んですから」の使用環境</p> <p>③日本語能力試験の文法について、2009年までと2010年以降の問題を比較して新傾向を考察</p> <p>★日本語能力試験の文法について気を付けておくこと ・普段あまり使わないような表現は出題されなくなった。 ・旧試験の出題基準に示されている項目以外からの出題が増えている。 ・教科書の中で指導項目として取り上げられていない部分にも注目したい。 ・複数の文法項目が複合的に使われている。 →複合的な形式の中で、慣用表現となっているものは、個々の文法項目を別々に学習しても理解できない。このような表現は、練習問題を解くことで身に付くものではなく、会話の中で習得し、使えるようにしていくことが望ましい。</p> <p>※「JLPTの文法の勉強と使う練習は別々のものではない」ということを教師も学習者も意識するようにしたい</p>

<p>受講者の声／ 成果と課題</p>	<p>《受講者の声》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初級者ばかり受け持っていて、N2 レベルはとても重荷だったが、今後は今日の講座のポイントをもとに勉強しようと思います。 ・新しい日本語能力試験が、「学んだ表現が実際のコミュニケーションの中で使うことができるようにならないと答えることができない」という試験になっているのは、とても大切なことだと思います。学習する表現の使われる状況などを明確にイメージできるように授業を工夫しなければならないと、反省した。 ・文法に関する学習者の誤用や疑問に答える際に、違いをうまく説明できる例文のストックを日ごろから自分の生活のなかで作っていかうと痛感した。 ・日本語学校と地域の日本語教室とでは教え方のスタイルがかなり違うので、スイッチの切り替えをする必要があると思った。 ・「生活のなかでよくある場面で普通に使われる複合的な慣用表現を会話の中で習得し使えるようにしていく」というのはすごく難しいが、生活者としての外国人にとってそこが一番知りたいところであろう。それを念頭に、文法の勉強と練習を別々に考えずに活動を工夫していきたい。 <p>《成果と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活者の日本語教室では文法を教えることはほとんどないと思われるが、文法を知っているということは、活動の支えになることを理解し、あやふやな部分は常に見直すことや勉強の必要性を受講者自身が気づくことができる機会になった。 <p>このような言語に関する基礎知識は受講者によってかなり差があるため、初任者研修でどの程度どのように扱うかを今後も議論し、実践し続けるべきであろう。</p>
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『日本語能力試験 JLPT 公式問題集 N1～N5』国際交流基金・日本国際教育支援協会（2012）（凡人社） ・『平成 16 年度 日本語能力試験 試験問題と正解 1・2 級』日本国際教育支援協会・国際交流基金（2005）（凡人社） ・『平成 17 年度 日本語能力試験 試験問題と正解 1・2 級』日本国際教育支援協会・国際交流基金（2006）（凡人社） ・『日本語能力試験出題基準【改訂版】』国際交流基金・日本国際教育支援協会（2002）（凡人社）

6 事業全体の評価

本研修の各講座は「日本語教育人材の養成・研修における教育内容」の(1)から(14)までをほぼ網羅することができた。特に、様々なしかも特色のある団体による事例研究では、ふんだんな活動紹介と実践研修を行うことによって、16下位区分の⑨「異文化理解と心理」における(9)「日本語学習・教育の情意的側面」に触れることが多く、受講者はそれら学習効果の高い活動を身に着けることができた。また、スケジュールにおいても「日本語教育人材の養成・研修によける教育課程編成の目安」に基づきOJTなどの実践研修も含めて90時間単位を修めることができた。

評価の方法は、評価委員会のメンバーの振り返りと受講者の「最終アンケート」に基づいている。(各講座ごとの受講者の学びは「事業報告書」内の「養成・研修の実施」の各項参照)

なお、本研修ではさらに、1年後に受講者たちがどのように成長したか、この研修での学びをどのように日々の活動に生かしているかを調査するために「追跡アンケート」を実施した。

<検証内容>

① 教育内容について

「日本語教育人材の養成・研修における教育内容」との比較と、受講者の学びから効果を検証

評価のポイント：受講者がどのような学びを得たか
学びをどのように活動に生かしたか
学びを将来へどう生かすと語ったか

② スケジュールについて

「日本語教育人材の養成・研修によける教育課程編成の目安」との比較

③ 研修方法について

「振り返りシート」「最終アンケート」

④ 受講後の活動について

「追跡アンケート」の結果

<評価>

①教育内容について

1. 社会・文化・地域にかかわる領域

本研修の前半の科目「日本語教育の大きな変化について」「これからの日本語教師に求められること」、「外国人の声」「やさしい日本語」、各事例研究、および後半の「教育実践のための技術」「日本語教師の成長と自己研修」において、3領域の社会・文化にかかわる領域は網羅することができた。(「2教育内容の確認」の○印を参照)

受講者の学び：

- ・日本語教育の最前線で活躍する講師から直接日本語教育の現況をきけたのは有意義だった。
- ・現在の日本語教育における問題点もわかった。
- ・これからの日本語教師の役割を元文化庁の小委員会の委員から直接聞き、自分はどうすべきか、何ができるのか、自分は何をしたいのかを再考する好機になった。

- ・研修後に行った活動を見た役所の担当者から「日本語教室が学習者の学習の場のみならず憩いの場として愛されています」という言葉をもらい、研修で学んだことが活かせたと実感した。今後も「生活に根差した生きた日本語教室」を楽しく作っていきたい。
- ・ほとんど一人で日本語教室を試行錯誤しながら運営されている事例もうかがい、大変に参考になった。

2. 教育にかかわる領域

本研修の中盤の科目「さまざまなアプローチ（語彙）（Cando）」「教室活動①②③」において、教育内容の（8）学習方法や（11）各種指導法、教授法を学んだ。具体的にはテキストを用いない場合、テキストを用いる場合、Cando シラバスや語彙や句型からのアプローチなどを実践的にワークショップ形式で研修した。（「**2**教育内容の確認」の○印を参照）受講者からは現場ですぐに応用して活動しているという報告が多かった。

また特に大きな収穫は、学習の情意的側面についてである。本研修の講師陣による活動の紹介は学習者一人一人に合わせる事が軸になっており、受講者は今までの自分の授業スタイルを改める気づきになった。また特記すべきことは、様々な団体による事例研究ではすべての講座が（9）「日本語の学習・教育の情意的側面」を当然のこととして含意しており、これは学習者ストラテジーにおける効果的な学習・教育方法が、地域の日本語教育の長年の経験に基づいて構築されてきたものであると本研修での収穫である。（「**2**教育内容の表」の✓印を参照）

受講者の学び：

- ・学習者に対してどのような姿勢や態度で臨んでいったらよいかを改めて確認することができた。
- ・「これが正解というものはない」型にはめるのではなく試行錯誤しながら一緒に作り上げていくものだと気づいた。ただ、教室の特徴、方向性、目的は見失ってはならない。そのうえで、教師は学習に対する引き出し（教える技術やコツ、応用するための知識、経験の集積と分析）を自分なりにそして教える側同士が増やしていくことが大切だと気づいた。

3. 言語にかかわる領域

言語にかかわる領域としては、2018年度に「外国語としての日本語」というタイトルで文法について触れた。日本語能力試験の新傾向を分析することも効果的な学習につながる知識であることも理解し、初任者研修にはふさわしい講座となった。また、「さまざまなアプローチ（語彙）」では市販の『きりり☆日本語語彙』『WeeklyJ』をとりあげ、語彙の体系的な学習法や効果的な学習法を実践研修で取り組んだ。受講者らは現場に持ち帰ってすぐに活用したという報告から、効果がうかがえる。

受講者の学び：

- ・文法を知っていると、学習者の誤用を分析しやすくなる。誤用訂正の根拠が明らかになり、自信をもって指導できるという点を改めて認識した。
- ・活動案を学習者に合わせて自分で作る方法がわかった。
- ・研修を受けながら、自分なりにいろいろなアイデアがわいてきて、あれもこれもやってみたいと思うようになった。

②スケジュールについて

月 2 回の土曜日に以下の時間割で行った。

1 時間目（9：30～11：00 2 単位時間）

10 分休憩

2 時間目（11：10～12：40 2 単位時間）

昼休み

3 時間目（13：40～15：10 2 単位時間）

主催側は受講者が無理なく研修が続けられるような日にちと時間の設定のつもりであったが、現場を持ち、仕事や大学院での研究をしながらの研修は、時間的に負担を感じる受講生もいた。また、11 月から 2 月という期間は長いと感じる受講生もいた。2 か月間くらいで集中できるというようだ。また、土曜日は他の講座と重なることが多く、日時設定はとても難しい。

③研修の方法について

本研修では、大きく「集合研修」と「実践研修 OJT」に分けて行った。また、それぞれ講座の内容と効果を考えて、「講義型研修」と「ワークショップ」スタイルに分けて行った。それをさらに「通学」の受講者には対面で研修を行い、「通信」の受講者には Zoom を使ったオンラインで研修を行い、活発な意見交換などが行われ効果がみられた。

また、受講者の時間的制約も考えられるため、講座はすべて録画をし、後日視聴できるようにしたが、これも「録画で見ても、その場で授業を受けているようでよかった」という評価を得た。

オンライン講座について

「参加者と同時に話ができ、東京近郊だけでなく、遠隔地（香港、関西、九州など）のとの意見交換、情報交換が有意義だった」という声が多く、高い評価を得た。一方、ワークショップ形式の場合は活動中の録画を編集したほうがいいのか課題が残った。オンライン受講が初めての方も多く、事前に練習が必要であった。Wifi 環境等、受講者側の問題で聞きづらいこともあり、オンライン研修の難しさが露呈した。（方法等詳しくは「[4](#)オンライン講座について」参照）

ワークショップについて

ワークの方法はさまざまであるが、各講師の工夫による効果的な活動が奏功し、学びの多い研修となった。通学でもオンラインでもペアワークでは、お互いに意見交換ができ有意義だった。このようなワークも遠隔地の受講者とも行うことができるが、行ったワークの数が少なかったのが反省点として残った。

実践研修について

研修後受講者の収穫と伸び率を最大限にするシステムとして実施した本研修の OJT は一定の効果がみられた。本来の OJT のように所属上長がそばにつくことができないため、約 1 か月後に担当講師からのフィードバックをもらうという形で機能させた。流れは以下のとおり。

「教育課程の検討」にもあるが、確認のため再度記載する。

OJT の実施：受講者それぞれの現場での実施

受講者の目標設定と振り返りを随時行う

OJT 実施後の振り返りは当該講師が必ず行いフォローする

OJT の方法： ↓ 集合研修（4 単位時間）
↓ それぞれ持ち帰って準備（2 単位時間）
↓ 1～2 週間後以内にそれぞれの現場で OJT 実施（1～2 単位時間）
↓ OJT シートの作成、提出（1～2 単位時間）
↓ 3～4 週間以内に集合研修にて共有、フィードバック

本研修の OJT システムは非常に効果が高かった。まず、OJT シートを作成することにより活動の計画を立てることから始まり、現場で実践を行い、その結果を電子メールで送付、振り返りの日に発表、共有、フィードバックという一連の流れは、普段の活動を振り返り、講座でヒントを得てよりよいものにアップデートしていく仕組みになっている。受講者からの満足度も高かった。

全体についての受講者からの感想

- ・気づきの多い研修だった。
- ・いろいろな講師のノウハウを得たのは有意義だった。
- ・現場重視、実体験重視の研修内容はとてもよかった。
- ・いろいろな意見を聞くことができ、またお互いにアイデアを共有できてよかった。
- ・受講者同士、出会いの場になった。地域の日本語教室での悩みを共有する仲間が増えた。
- ・この研修の出会いで、日本語学校で仕事をする機会を得た。受講前には考えてもみなかった。
- ・これからも様々な研修に参加し、もっと自分なりに研鑽を積んでいきたいと思った。

④受講後の活動について

2018 年度、2019 年度の受講者より 50%の回答が得られた。受講者は受講後の学びを生かし、それぞれの現場で活動を積極的に続けている様子が報告されていた。2018 年度の受講者は受講後 1 年経って改めて自身を振り返る機会にもなったようだ。このような調査は、自己の成長を実感すると同時に、「成長を続ける教師」としての自覚を新たにすることもでき効果が期待できる。本研修では、東京を中心に、関東はもちろん、東北、中部、関西、四国、九州からの参加があったが、このような Web 受講ができる研修の場合は、所属上長から直接評価をもらうことが不可能であるため、このような修了後の自己評価という形式をとった。今後、初任研修として所属上長からの評価をどのように得ればいいのか、課題が残った。

以下、アンケートの結果を報告する。（報告数の多い順に記載）

1. 所属 ・受講当時 地域の日本語教室
日本語学校
フリーランス
大学院（学生）
・現在（または、今後進もうと考えている方面）
地域の日本語教室（支援者、教室運営責任者、コーディネーター）
日本語学校
国際交流協会コーディネーター
小中学校
ビジネスマン向け教室
2. 参考になった活動
 - ・「やさしい日本語」
使用して教室活動がよくなった
既習語彙を意識するより、よかった
他の支援者への普及を実感、事務局に提案し講座を持ち掛けている
 - ・Cando ベースの教え方
『みんなの日本語』も学習者に合わせて工夫できた
 - ・学習者中心で話を広げる活動
 - ・学習者とともに学ぶ姿勢
 - ・レベルとゴールの可視化(スケーリング)をすることで学習者のモチベーションが維持できること
 - ・学習者、支援者、教師三者の参加型学習活動
 - ・学習者、支援者、教師三者が企画運営する課外活動
 - ・学習者が先生になる活動（料理教室など）
3. 将来の方向について考えたこと
 - ・大学院でも学んでみたい
 - ・さまざまな現場で対応できる教師を目指したい
 - ・地域日本語教室で収入が得られるのならやってみみたい
4. この講座に希望すること
 - ・Web 受講で研修を継続したい
 - ・ITC に関する講義を受講したい
 - ・学習者を含む教室関係者と地域住民との交流の企画と注意点を もっと学びたい

その他

自分の変化について

- ・受講前より教室活動が活発になったことを実感している

- ・学習者から「最近、教室がとても楽しくて幸せです」と言われた
- ・学習者同士の関係がよくなった（LINE でつながった）
- ・支援者、教師、コーディネーター、事務局との情報の共有、連携の重要性、難しさを実感した
- ・日本語教師の「専門性」をより意識するようになった

感想

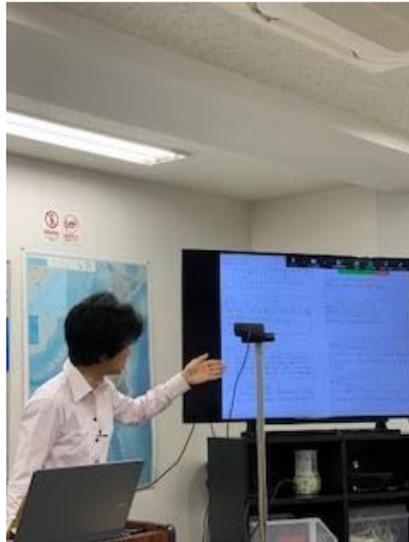
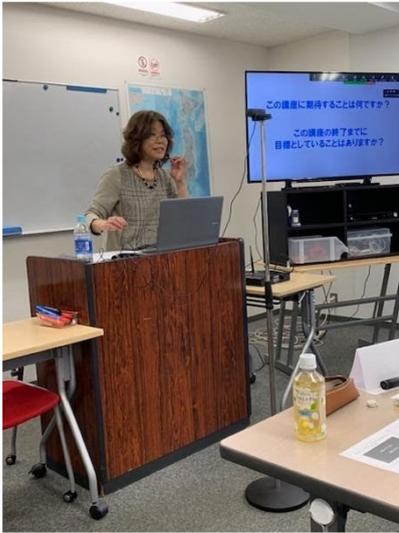
- ・地域の日本語教室は多文化共生の場であることを再認識
- ・教師、コーディネーター、学習者から直接生の声が聞けたのが活動の参考になった
- ・様々な形での活動現場を知ることができ教師としての視野が広がった
- ・課外活動での参加料の考え方などが実施の参考になった
- ・インターネット使用による遠隔学習のヒントを得た
- ・地域での日本語教師の立場、処遇は今後どうなるのか

今後の課題

より実践的な研修においては、受講者が実際に現場に赴き、教室活動等を見学するのが効果的だと思われるが、全国からの受講者に対して実施するのは不可能である。一部事例研究では、活動の様子を録画したものを視聴することができたが、発表会や避難訓練等の活動だけではなく、教室活動の様子を見たいという要望もあった。学習者の許可を得る必要があることや、分単位で切り取った動画を見ても、教教室活動の実際はつかめないとも思われる。受講者が他のさまざまな教室の現場を見るという機会をどうやってつくればいいのか課題が残った。

7 研修の様子

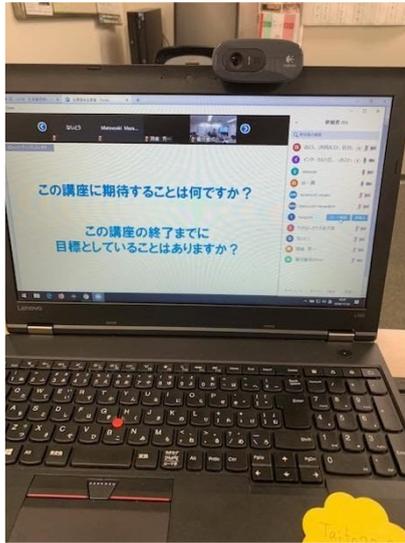
○インターカルト日本語学校での授業風景



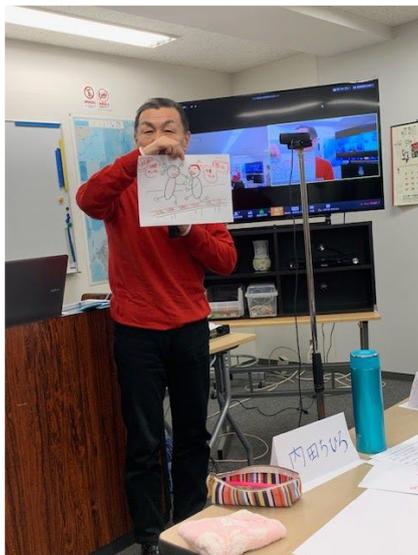
○福島の研修風景



○ZOOMでの授業の様子



○受講生の様子



○最終日 通学と通信の受講生と

